



子どもたちの心を聴く

和歌山教会
和田 治

牧師として、私が困難を感じてきたことの一つに、「相手の心を聴く」ということが挙げられます。話を聴いていたはずが、いつのまにかしゃべっている。相手の心の声に耳を傾けているつもりが、表面的なことしか聞けていない。相手の心に配慮しているつもりで、踏み込んで欲しくないと思っているところに、つい踏み込む。このような失敗を繰り返すのが私の現実です。教会学校教師として子どもたちの心を聴くとなるとなおさら「難しいなあ」と感じます。しかし、彼らの心に真に福音を届けるためにはどうしても、その心の内側の声を聴き取らねばならない、と思わされるのです。

聖書の原則を子育てに適用することを学ぶために作成されたテキスト『見つけた、子育てのよろこび』（バーバラ・バウマン、龍野さおり共著、ファミリー・フォーラム・ジャパン）のレッスン7「コミュニケーション：子どもの気持ちを理解する」では、次のように指摘されています。「私たちはたびたび、子どもの気持ちを受け入れないで、その気持ちを正そうとします。…まず、注意深く聞き、言葉だけでなく、その気持ちを聞き取るようにします。その気持ちが正しいか間違っているかなどと裁かないで下さい。」「英語を話す文化では、『相手の靴に自分を入れる』という表現があり、それは相手の視点をとおして物事を見るという意味です。子どもの靴にあなた自身を入れることは、子どもの視点から物事を見てみようとするということです。自分が子どもと同じ年だったら、どうということ喜び、寂しさ、落胆、恐れを感じるか考えて

みて下さい。それから、子どもの気持ちに対して一番よいと思われる答え方を考えてください。」「子どもたちに私の靴をはくことを強要しがちな私には、ドキリとする言葉です。

教会学校教師の第一の役割は、子どもたちにみ言葉を「語り伝える」ことではないでしょうか。そこには、相手の心にそれを受け止める準備が整っているかどうか考えもせず、一方的に教師の価値観を押し付けてしまうという落とし穴がありはしないでしょうか。話すことと同時に、いや、それ以上に、「聴くこと」の訓練は重要です（箴言18・13）。

私たちはいつどこでその訓練を受けることができるでしょうか。魂への配慮について書いている牧会者やカウンセラーは、しばしば「黙想と祈り」をその実際の訓練の場として強調しています。多くの霊的指導者が「沈黙（silence）と孤独（solitude）」を通して聴く力を養ってきた、との堀筆師の指摘には説得力を感じます。日々、静まって主と一対一で細き御声を聴き、応答して自らの心を注ぎ出す、主との生きた交わりなしに、どうして子どもたちの心聴くことができるでしょうか。

私たちの教会学校の今年度の課題は、子どもたち一人一人の心を聴き取ることです。み言葉が聞き流され、実生活に結び付かないまま終わる、ということにならないためです。具休策として分級の体制を変えつつあります。教師自身の深い「黙想と祈り」があつてこそ、それが活きるのだと自戒しています。

牧羊者

目次

巻頭言	1
カリキュラム解説	3
教師養成講座 教会学校の歴史(1)	4
復活の主 ≪4月教案≫	10
約束の聖霊 ≪5月教案≫	22
聖霊の働き ≪6月教案≫	34
牧羊ひろば(放出教会)	49
おわりに	50

カリキュラム解説

二〇〇八年度 カリキュラム解説

(編集部)

はじめに

今年度は、二〇〇七年度～二〇〇九年度の三年カリキュラムの第二年目になります。

年題は、「愛に生きる」です。

テーマ聖句は、「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい」(ヨハネ15:9)が掲げられています。

今年度の夏期教案は、「愛の使徒ヨハネ」です。今年度は、パームサンデーもイースターもありませんが、父なる神の愛、子なるキリストの愛、聖霊なる神のきよい愛が、幼い魂に深く刻まれ、彼らもまた、愛の使徒として造り変えられていくようにと祈りつつ、教師である私たちも最高の愛に生かされ、生徒たちに示し語っていきたく願います。

月ごとの解説

第1期(4月～6月)「聖霊による愛」

4月「復活の主」

3月23日のイースターより何回かキリストの復活の事実と、復活の主ご自身を知ります。新学年を迎えてのふさわしい单元となることを祈ります。

5月「約束の聖霊」

5月11日がペンテコステ記念日であり、また母

の日と重なっています。母のように慰めに満ちた聖霊なる神を学び、体験しましょう。

6月「聖霊の働き」

花の日、子どもの日、父の日の行事を含む月ですが、現実の生活の中に生き生きと今も働かれる聖霊のお働きへの、力強い信仰が養われるときとなりますように。

第2期(7月～9月)「実を結ぶ愛」

7月「聖霊の実」

聖霊の実が、一人一人の内に結ばれることを信じ、祈りつつ取り組みましょう。

8月「主の弟子たち」

ペテロ、ヨハネ、アンデレの内に結ばれていった聖霊の実を確認し、また追ひ求めます。

9月「神のしもべたち」

旧約聖書の神の僕たちと共にあつて愛の実を結ばせた神の霊のお働きに学びます。

第3期(10月～12月)「王たちの愛」

10月「はじめの王たち」

ダビデとヨナタンの主にある美しい愛の姿に学び、主にあつて神と人への愛を養い育てていただきます。

11月「選ばれた王たち」

子ども祝福礼拝や収穫感謝、そして第1アドベントに入る月です。さまざまな面から神と人への愛の姿を教えられます。

12月「クリスマス」

「クリスマス」——それは愛というキャッチフレーズがぴったりの月です。クリスマスにあらわ

された驚くべき神の愛を信じて満たされます。

第4期(1月～3月)「キリストの愛」

1月「ひとり愛する愛」

「私、一人」に注がれる、キリストの愛を実感することができるよう。そして、私たちも一人一人を大切にするとされますように。

2月「奇跡をうむ愛」

奇跡とは、私たちへのほとばしり出るキリストの愛の結果だということを知り、その愛の本質、最高の愛に触れていただき、主にあつて愛の人と変えられることを願います。

3月「最高の愛にむかって」

最終年度二〇〇九年度のはじめにくるパームサンデーとイースターに向かって、受難節におけるキリストの愛を深く味わい、主の心を心とする者とならせていただきます。

おわりに

今年度のカリキュラムも、教会暦を大切にして組みました。

まずは教師自身が、今年度の年題であるアガペーの愛に生かされ、満たされ、ご奉仕ができますように。また最高の愛のわざである祈りの中で、一人一人の名をあげてとりなし、多くの救霊の実が結ばれていきますようにと、お祈りいたします。

また、カリキュラムに沿って組まれた「子ども聖書日課」を、教師の皆さんが一週間早く読むことは、良い予習となりますので、ぜひ子どもたちと共に続けて行なってください。

教師養成講座

教会学校の歴史

浮田益夫

はじめに

歴史とは、「人類社会の過去における変遷・興亡のありさま。またその記録」『広辞苑』。「人間社会が時間の経過にともなう過去から現在に至るまでうつり変わってきた過程（の中で見られる出来事）」『現代新国語辞典』とあります。教会教育の歴史は、神の言葉とこれに服従した人間の歴史、換言すると創造主である神が被造物である人間をとおして現されたご自身の栄光の歴史と言えるでしょう。「変遷・興亡」からは現在の教会学校（以下CSと表記）への主の熱いまなざし、聖霊のうめき——今日の教会、CSの現場のうめき——を覚えます。「教育」については、特に新約聖書が、「教えよ」という命令で織られていることに気づかれます。ちなみに「教える」（ギリシャ語—デイダスコ—）は97回用いられており、その大半は四福音書、使徒行伝に見られます。

CS教育の歴史を学ぶに当たって大切なことは、「言（葉）は肉体となり」（ヨハネ1・14）とあるように、私たちがみ言葉の経験という裏付けを与えられつつ、「神と共に働く者」（Ⅱコリント6・1）とされていくことだと思えます。

第一章 教会学校の歴史

教会学校の歴史には三つの大きな山があると言えます。それは一七八〇年、英国人キリスト者ロバート・レイクスによって始められた伝道的日曜学校運動、次にこの伝道的日曜学校の行き方に反対する自由主義神学を基礎とした宗教教育運動、そして正統神学と共にCSの主体である教会と、教会が存在する社会を重要視している現代のCSの方向であります。

第一節 レイクス日曜学校以前

CSの歴史は一七八〇年、ロバート・レイクスが、英国グロスター市に一軒の家を借りて、有給の女性教師を4名雇い、おりからの産業革命の犠牲者となった貧しい労働者たちの子女たちに、一般の実用的な教育と信仰の教育を、日曜日毎に施したことに始まると言われます。

しかし、このレイクス以前にも教会教育は施されてきました。特にヨーロッパの教育の発端となつた宗教革命時の教会教育などは、知っておく必要があると思われまふ。そこでレイクスの日曜学校（以下SSと表記）以前の教会教育を概観します。

1 族長時代の宗教教育

アブラハム時代の神のみ言葉の教育は口うつしで行なわれたようです。篤信の母ヨケベデによる宗教教育にあずかったと思われるモーセは、イスラエルの民たちに「わたしがあなたに命じるこれらの言葉（主の言葉）をあなたの心に留め、努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、…これについて語らなければならぬ」（申命記6・4以下）と命じています。当時のイスラエルの民の間では、十戒や申命記六章に見られる「愛神、愛人」の戒めを印に表して手につけたり、家の入口の柱や門に書きしるして、子女たちにも語り教えていました。当時の宗教教育の場は幕屋での礼拝時、安息日、大祭りの日、それに社会や家庭（天幕）でした。

2 バビロン捕囚前の時代 土師記ユダのバビロン捕囚

サムエルが幼少の頃より信仰の教育を施されていたことは皆さんもご存じでしょう。彼は後に預言者学校（サムエル上19・18〜20）を建てました。少年ダビデをはじめ、エリシャ、エレミヤ、ダニエルその他の預言者たちが続出した陰には、こうした学校が大きな力となっています。

3 バビロン捕囚後の時代

この時代に見過すことのできないものは、学士、祭司エズラの聖書学校です。バビロンからエルサレムに帰還した後のイスラエルの民全体の信仰は、墮落の一途をたどるようになっていました。この状態を見たエズラは祭司の立場から祭儀的改革を施し、人々の心を主に向けようしました。彼は

民に律法を教え、異教徒との混交をきびしく禁じました。後年ユダヤ教が、書かれた律法を中心に展開していったのも、エズラの改革に端を発していたと見ることができます。

会堂における宗教教育

バビロンに捕囚中、イスラエルの民たちはエルサレムの神殿に代えて会堂を建て、そこで聖書や祈りを学んでいました。エルサレム帰還後も会堂に於ける聖書の学びは盛んになり、イエスの時代には会堂の数は400近くになっていました。

4 新約時代

ヘブルの習慣では5才から教育が行なわれ、大いなる戒め(申6・4〜9他)やハレルヤ詩篇(詩113・118)が教えられ、6才になると、ラビたちの学校に通い、10才で聖句の解釈を習い、12才で律法の家に行つて(「律法の子」となり、一人前のイスラエルの会衆に入れられ、律法を守ることが義務づけられていました。15才では更に複雑な戒律を学び、18才で結婚の時期に達しました。ラビの教育内容はいわゆるこの世の知恵や知識ではなく、箴言や伝道の書に主張されている中心思想「神を恐れ、その命令を守」ることでした(伝道の書12・13)。

5 初代教会の教会教育

初代のキリスト教会ではユダヤ教をはじめ、いろいろな「使徒たちの教え」(使徒行伝2・42)を受けた求道者、回心者たちに、キリスト教の信仰を教える「信仰問答教育」が盛んでした。当時の教会はユダヤの統治国ローマ帝国やユダヤ教徒の

迫害に備えて、聖書学校を建てました。一方、家庭(Ⅱテモテ1・5)や会堂でのキリスト教教育も続けられました。信仰問答教育は初めの3世紀間、キリスト者に信仰の要綱を教えるのに大きな役割りを果たしましたが、キリスト教がローマの国教となった4世紀頃からは姿をひそめてしまいました。

6 中世の教会教育

中世の教会教育は低調でした。それは当時の多くの教職が無学であつたことに加えて、ローマ・カトリックの「人が救われるのは洗礼、聖餐せいさん、その他の礼典を守ることによる」という教義が強調され、聖書の権威が軽んじられ、説教が無視されたためでした。礼拝で聖書から教えられることのなかつた親たちは、家庭で子女にこれを教えることもできませんでした。

7 宗教改革以後の教会教育

一五一七年のルターによる宗教改革以後、(礼典ではなく)聖書がキリスト教信仰と実践の最終の権威であることが高調されるようになり、プロテスタント教会では、礼典に代わり、み言葉が礼拝の中心に置かれ、説教が重んじられるようになりました。また堅信礼(幼児洗礼を受けた者が、自己の信仰を表現し、教会員としての権利と義務を有するようになる式)の前に、信仰問答を教えることが再興され、両親は家庭で子女のために聖書と教理を教えることが強調されるようになりました。

ところで、聖書はティンダルやルターらによつ

て、一般庶民の言葉に訳されたものの、民衆はこれを解読する学力がありませんでした。彼らは聖書が読めるように教育される必要がありました。カルビンがジュネーブで初等教育を受ける学校を開き、宗教(キリスト教)と一般教育を一つにして教えました。彼の感化を受けたジョン・ノックスは、スコットランドに同じような学校を始めました。「近代のヨーロッパの教育の原動力は宗教改革による聖書の発見にある」と言われるゆえんがここにあります。

ここで、ついでに触れておきたいことは、キリスト教は「書物の宗教」であるということです。このようにして、宗教改革の当時は学校、家庭、教会のすべてにおいて、聖書の学びが行なわれたので、教会教育は今日よりも徹底的に行きわたっていました。聖書を民衆のものとするために払った改革者たちのこのような努力に、私たちは敬意を表すべきでしょう。

8 近代の宗教教育

こうした16世紀のやり方のあるものは欧州では近代まで続きました。今日でも政教分離の行なわれていないイタリア、ベルギー、スペイン、ポルトガル、戦前の東欧諸国の大部分(以上カトリック教国)及び北欧諸国、西ドイツ、スイス、イギリス(以上プロテスタント教国)、すなわち教会の財政が税金によってまかなわれている国の学校には正科としての宗教科が置かれています。

一般教育に宗教を加味した学校はアメリカにも及びましたが、米国では欧州とは異なり、一七八

三年の独立以後は、政教分離の原則が確立し、教会教育は公立学校では行なわれず、教会や家庭で行なわれるようになりました。

9 日曜学校運動誕生の前夜

宗教改革で上がった信仰の炎は、まもなく下火になり、キリスト教の一般民衆に対する感化力も色あせてきました。

米国では一七〇〇年以来、開拓者の影響や急激な人口の移動、戦争の続発、政教分離などが原因となって宗教、道徳が退廃して来ました。

欧州では17世紀になるとプロテスタント主義は冷たい知的な正統教理を展開する学問にしかすぎないものとなり、その結果、宗教戦争が生じ、更に合理主義哲学や経験科学の台頭とも相まって、神よりも人間の理性を重んずる理神論に陥っていきましました。そして聖書は単なる道徳のガイドブックに、キリストは単なる道徳の教師にしか過ぎない者とみなされるようになりました。

リバイバル運動の起こり

このとき、神はウエスレー、ツインツェンドルフ伯、ホイット・フィールドらを指導者とするリバイバルを起こされました。このリバイバルの結果、人々は列をなして教会へ流れ込んできました。そこで彼らを信仰的に教育する必要が生じてきました。そしてこのことが後の日曜学校運動発展の素地の一つになりました。

第二節 日曜学校の誕生

1 レイクスの日曜学校運動

ジョン・ウエスレーは「福音は社会に対して衝撃力を持つべきである」と主張し、奴隷廃止を唱えたり、英国最初の自由施療院を設立したりしましたが、その彼の感化を受けた一人に、ロバート・レイクス（一七三五―一八一）がいました。彼はたまたま印刷業務のため、英国グロスター市の郊外を通っていたとき、おりからの産業革命によって家庭を破壊された貧しい子どもたちが、工場で動物のように働いているさんたんたる姿を目撃しました。滅びゆく彼らのために愛の炎の燃え上がるのを内に覚えた彼は、さっそく市内に一軒の借家を見つけ、4人の有給女教師を雇い、6才から12、13才の子どもを集め、日曜日毎に、昼休みの1時間を除いて、午前10時半から午後5時まで、読み書き算数の一般教育と聖書の学課を教えるようにしました。

彼はこれを彼の主筆するグロスター・ジャーナル紙上に報告、宣伝しました。その結果、この運動は多くの人の共鳴を得、おりからのリバイバル運動とも合流して、一大運動となって発展していくことになりました。イギリスでは初等教育が国家の手に移されるまで、この種のSSが続けられました。

スコットランドでは先の宗教改革の折、ジョン・ノックスらによって始められた初等教育が普及していたので、キリスト教の教育のみが施されるようになりました。この運動は全ヨーロッパをはじめ米国へも普及することになりました。

2 レイクス日曜学校運動の特長

①それは信徒個人の（教会主体ではない）自発的事业であり、②リバイバルのもたらした伝道的、慈善的動機に基づくものであり、③貧しい子どもたちに必要な教育と訓練を施して、すぐれた労働者にするというの実用性に富んだものでありました。

ところで、私たちはレイクスに先立って、あるいは同じ頃、SSが米英の信徒たちによって開始されていたことを見逃すことは出来ません。一七四〇年には米国カネチカット州のジョセフ・ベラミーが、同じ頃ロンドンのウエスレーの鋳物工場でサイラス・トッドが、一七七三年にはロンドン近郊のハンナ・ポールが、一七九〇年以前には米国バージニア州のメソジスト教徒W・エリオットが（自分の所有地の中で白人の子どもや召使い、奴隷たちに、子どもたちに聖書や信仰の問答を教え、SSを開いていました。チャールストン・メソジスト協議会もその頃SSを開始していました。

3 日曜学校運動の明暗

迫害されたSS

せっかく発展していったSS運動に対して英国人の中には、SSが国内の貧しい子どもたちを刺激して、「自分たちは上層階級の人たちより人間として何も劣っていない」という思想を植えつけ、民衆を煽動（せんどう）して、革命をもたらすのではないかという恐れから、SSを迫害する人が出て来ました。時あたかも海の向うのフランスでは、フランス革命の結果、民衆の反乱の刃に倒れた無残な貴族のしかばねが、巷（まち）にさらされていたのです。

更に教職の中にも、平信徒が少しばかり伝道心があるからといって、勝手にSSの教師になりすまして、教会の外で勝手な事をしている彼等が教職の支配を離れていったらどうなるだろうと、危惧する人がいました。

この結果、ある地方ではSSに従事する人たちは相当迫害され、SS運動は多少とも反教職的性格を帯びるものとなってきました。

歓迎されたSS

一方、リバイバルの結果生まれた教会、またリバイバルに影響された教会ではSSは歓迎されました。

ところでSSに反対する人々はリバイバルの指導者であるウエスレーやホイット・フィールドに反対する人たちであったことから、SS運動はSS運動に反対する人たちへの挙党体制の確立、更にリバイバルで回心した人たちの教育という二つの理由で発展していくことになりました。またSSは若い人たちの伝道的手段として採用されるようにも変わっていきました。

米国におけるSS

1 米国キリスト教会の事情

宗教改革で生まれた種々のプロテスタント教会（教派）は一六〇七年から一七三二年の間に、ほとんど残らず米国に代表を持つようになりました。米国のキリスト教はヨーロッパから離れていたこと、教会財政が国税によらず信徒の献金でまか

なわれたこと、平信徒の活動が盛んであったこと、リバイバルが循環的に起こったこと、更に渡米してきた教派が適度に急進的であったことなどによって、驚くほどの創造力を発揮するに至りました（ケアンズ）。これは同時に米国におけるSS運動の急速な拡大を促すことにもなりました。

米国では一七八三年の独立までは宗教（キリスト教）教育は公立学校で一般教育と兼ね行なわれていましたが、独立以後は政教分離の原則が採用され、宗教教育はSSで行なわれることになりました。

ところが米国でも英本土と同じく、SS運動に反対する動きが生じ、教会とSSとの間にすき間ができると共に、SSはここでも反教職運動と結びつくことになりました。そして、このことは（一八二四年に設定された）米国日曜学校同盟の役員や個々のSSの指導者が平信徒をもって構成されるという伝統を生むことになりました。

2 米国型SSの特長

当時の米国でのSSは、①教会の存在する地域社会の宗教教育を担当するSS。②下町に流入した貧しい移民たちのための都市伝道学校。③西部開拓者たちのための開拓SSの方向へ向かっていきましたが、米国全土の開発とともに、それらはやがて、伝道と教育的プログラムを備えた①の型にまとまっていきました。

SSのプログラムの典型

さて、当時のSSのプログラムは英、米、カナ

ダ、ドイツなどを例にとってみますと、賛美を主とした礼拝、20分〜25分の分級、閉校式における校長の訓話、報告、図書の貸し出しとなっており、今日のものとほとんど変わりません。スマートは、この固定したプログラムがSS教育の発展を妨げているのではないかと、指摘しています。

第三節 宗教教育運動の誕生

1、従来のSS運動への批判勢力の台頭

今まで見てきましたように、レイクスに始まるSS運動の目的は教会よりもむしろ伝道、すなわち人々の回心にありました。従って分級よりも幼児から成人に至るまで、一緒に講堂で説教を聞くことに時間をかけていました。一八七二年、統一学課制が採用されたものの、4才の幼児も成人も同じ聖書の場所を教えられていたのです。

そこで19世紀の末になって、こうしたSSの方向に対する批判勢力が台頭してきました。

この批判勢力の台頭の背景には、①自由主義神学、②聖書の歴史的批判勢力の台頭、③普通教育の進歩などという現象がありました。

中でも自由主義神学の台頭は19世紀の末頃、米、英、欧州の多くの教会を侵すこととなりました。彼らの主張は「人間はキリストの救いによることなしに、人間自身の力で社会を完成できる」というもので、神への信頼を捨て、人間に信頼を置くというものでした。その指導者としては欧州ではシュライマッヘル、ヘーゲル、英国ではコールリッジ、米国ではエマーソンらが著名です。彼らは

罪のさばきや地獄を説き、悔い改めを迫る従来のSSにはがまんできないとしました。また聖書を文字どおり信ずる信仰を退けるとともに、子どもたちは発達段階に応じて教えるべきであると主張しました。

2、米国宗教教育協会の誕生と進展

一九〇三年、こうした従来のSS運動に対する批判勢力が、シカゴで開かれた大会で具体化し、宗教教育協会なるものが設立されました。

ちなみに従来のSSと「宗教教育」の対照を表にしてみました。

立 場	長 所	
	短 所	特 長
SS運動	キリストに信頼を置く正統神学	狭くはあるが熱情を持って聖書を土台とした福音の悔い改めに導く力を主張。救霊、教会建設に貢献した。
宗教教育運動	人間の理性がいつさいの問題を解決するという人間に信頼を置く自由神学	教会歴史上かつてなかった教会教育の対象である生徒のために情熱を傾注。科別学課を発表採用した。また福音の社会的意義についてまじめに考えさせるようにした。
	キリスト教を宗教の中の一つとしか考えず、キリスト教の中心教理(使徒信条)を捨てた。このことは彼らがキリスト教教育という用語の代わりに「宗教教育」という用語を用いたことから理解される。	キリスト教を宗教の中の一つとしか考えず、キリスト教の中心教理(使徒信条)を捨てた。このことは彼らがキリスト教教育という用語の代わりに「宗教教育」という用語を用いたことから理解される。

図表を見ても分かるように、あまりにも対立的な両者は互いに相手の短所を激しく非難し合いました。すなわち前者は後者を「近代主義者」、「キリスト教信仰を捨てる者」と言い、後者は前者を「知的には全く空虚だ」と指摘しました。

しかしこの二つの流れはその後、並行したまま今日に至っています。つまりある教会は伝道的要素を多くとり入れ、また他の教会は教育的要素を多くとり入れるという具合で今日に至っています。

第四節 現代の教会教育の方向

1、崩れた自由主義神学

さて人類の前途を楽観的に論じていた自由主義者たちの主張は、あの一九一四年〜一八年に生じた第一次世界大戦によって、無惨にも打ち砕かれてしまいました。時あたかも、バルト、ブルンナー、ニーバーなどの新正統主義と称せられる神学者たちが現れ、自由主義の楽観的人間観の非を暴露し、人間は神の救いを受けなければ完成されないものであるという福音主義を唱えたのでした。

しかし彼ら新正統主義者たちは、聖書に対する批判的態度については宗教教育者たちと同じを同じくしていましたので、教会教育のための新しい神学を打ち建てるどころまではいきませんでした。彼らは聖書には神の言葉と人の言葉の部分があると主張し、聖書の説く、十全靈感説(Ⅱテモテ3:16)を信じていません。

2、現代の教会教育の方向

小林公一氏は『キリスト教教育』の中で、マク

ス・シエラーの「人間の本质と起源とに関する諸見解は、われわれの時代におけるほど不確実で、不明瞭で、また多様であったことはない。(中略)人間はもはや人間の何たるかを知らない」との論評を紹介しておられますが、現代ほど人間そのものに對する認識が問題視されている時代はありません。

こうした中であって、J・D・スマートは先に述べたSS運動と、宗教教育運動の二つの方向が神学的発想において全く異なっているゆえ、互いに相容れないものであると述べるとともに、「現代はこれら二つのものとは異なつた全く新しい観点からのものが検討されつつある。それは、①キリスト教教育における神学の重要さを認め、②教育の主体である教会への理解を深め、③家庭と地域社会の伝道を重要視する方向へ向かつて進みつつある」と述べています。

第二章 日本におけるCSの歴史

本章では日本の教会学校の歴史の概観とそれにとりなう今後の問題点について考えてみたいと思います。

第一節 日本のCSの歴史の概観

カトリックはさておき、一八五九年のリギンス、C・M・ウィリアムズ、ヘボンらの来日によるプロテスタントの上陸より、今日まで英米のSSの影響を受けつつ、日本の教会教育はいくつかの大きな山を経てきているといえます。

1 安息日学校 発端より明治20年頃

日本初のSSは「第一日曜学校」と称せられ、一八六四年（元治元年）6月第1日曜日、外人の子女を対象に、横浜居留地36番、ヘボン博士の診療所で開かれました。次いで明治6年（一八七三年）2月24日、キリスト教禁制の高札が撤廃されるや東京、神戸、弘前、横浜、岡山、長崎などで、「安息日学校」が開校されるようになりました。

当時、日本ではまだ日曜休日が実施されていなかったため、キリスト教が日曜日を基準とした安息日を守るということを証するために、SSは「安息日学校」と呼ばれました。

その内容は、だいたい個人的な教理問答の勉強でした。しかし、その姿勢には非キリスト教的日本の社会に対して「挑戦する」——幼子を獅子の口より奪回する——というはつきりした態度がうかがわれます。

※この「挑戦」の姿勢には賛否両論、折衷案などがあるのではありません。

一八七八（明治11年）岡山安息日学校が開かれ、その2年後、岡山組合教会が設立。津山、倉敷、玉島、西大寺、香登、その他の岡山県下における教会は安息日学校が先駆けとなって設立される。（『教会教育の歩み』24ページ）

当時の安息日学校の教師の苦心

日本で太陽暦が採用されたのは明治5年末でした。このとき同時に七曜制も採用されましたが、

明治9年4月、日曜日が休日と定められるまでは、1と6の日が休日でしたので、子どもたちは日曜日でも登校していました。そこで、安息日学校の教師たちは土曜日になると、「明日は日曜日で安息学校があるから忘れないように……」と、生徒の家を訪ねて回りました。当然、安息日学校は日曜日午後に行なわれました。子どもたちの日曜学校通学には多くの困難がありました。

一八七〇年代までの日曜学校への妨害は厳しく、通学する子どもは友だちだけでなく教師からも非難された。「ヤソ、ミソ、テッカミソ」「アーメン、ソーメン、ヒヤソーメン」などの揶揄のことばも全国的に広がっていた。東京・京橋で「ヤソばあさん」とアダ名されながら、豆や菓子配り、子どもを集めた大阪女学院森田金之助院長の祖母、美登女のような多くの熱心な信者の働きにより、徐々に日曜学校に子どもが来るようになったと思われる。（前掲書26ページ）

2 日曜学校 明治20年～30年頃

明治25年頃から「安息日学校」という呼称に代わって、「日曜学校」という名前が使用されるようになり、明治30年頃には「安息日学校」という名前が消えていきました。

この頃のSSでは、主として一八七二年（明治5年）、米国で開かれた第五回国際日曜学校が採択した「万国日曜学課」による聖書の学びが持たれていました。

3 日曜学校運動の進展 明治30年～同末年

明治32年、文部省訓令により、ミッションスクールでも宗教教育ができなくなったため、その肩代わりをSSが行なうようになりました。しかし当時のSSは宗教教育の機関ではなく、伝道というはつきりした目的をもって続けられていたもので、ミッションスクールの役目の一端を荷なうことはできませんでした。

ところでこの時代は明治39年12月17日、世界日曜学校協会からフランク・ブラウンが渡来したことに刺激されて、SSが「運動」としてだんだん発展していく時代となりました。そして同40年1月4日、「日本日曜学校協会」が生まれ、以後、毎年全国日曜学校大会が開かれるようになりました。

明治45年4月、日比谷公園で行なわれた生徒大会では、「神は愛なり」の大旗を軽気球になびかせ、人々の目を見はらせたということです。大会後、万人の参加生徒は音楽隊を先頭に行進、二重橋前で万才三唱、君が代斉唱をしました。

また当時のSS運動の他の特長はSSが信徒による超教派的運動として発展していったことです。これは英米のSSの影響によるものでした。大正9年10月5日を期して東京帝国劇場で行なわれた「第8回世界日曜学校東京大会」は当時のSS運動の頂点とされています。この大会には世界30ヶ国より一、二二名、国内から七八六名、計一、九九八名の参加者があり、日本の社会にSSを認識させた最初の国際集会でした。

以後、SS運動は昭和の初めごろまで順調に発展していきます。

（つづく）

聖書 ヨハネ20・24・29 テーマ トマスよ

序論

(鎌野)

今週から始まる二〇〇八年度は、「愛に生きる」との年題で学びを進める。最初の3か月間は「聖霊による愛」が期題だが、この4月は、復活された主イエスと弟子たちの関係から、主の愛がどのようなものかを探求したい。まず今週は、先週学んだ個所の直後に記されているトマスの言動を取り上げてみよう。トマスは、主を見なかったゆえに主の復活を信じることができなかった愚かな弟子だったが、主はそんな彼さえも愛し、彼が信じられるように導かれたのである。

一、一緒にいなかった者への愛

どういう理由があったのかかわらないが、10人の弟子たちが集まっていた家にトマスはいなかった。彼は、ラザロの復活記事の直前には「先生と一緒に死のう」と言い(11・16)、また十字架刑の前夜には「主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません」と言っている(14・5)。そこから推測すると、彼は実直ではあっても悲観的な性格であったようだ。救い主だと強く信じていた主イエスが、十字架で悲惨な最期をとげられたことで意気消沈し、布団をかぶって寝込んでいたのかもしれない。他の弟子たちと一緒にいることさえも嫌だったのだろう。

私たちも、教会に行くのが嫌になったり、他の兄弟と会いたくないと思ったりしたことが過去に

何度かあったのではなからうか。しかし、そんな者であっても、主は決して見捨てられない。他の福音書には書かれていないこの記事をヨハネがえて取り上げたのは、そのような者に対する主イエスの特別な愛を示したかったからであろう。

二、不信仰な者への愛

多分その日のことだったと思われる。トマスが弟子たちの所に来たのか、弟子たちがトマスの家に行ったのか明らかでないが、両者は会った。弟子たちが「わたしたちは主にお目にかかった」と言っても、トマスは全く信じようとはしない。しかも、単に主を見るだけではなく、自分の指を主の手の釘あとや脇腹にさし入れてみなければ信じないという徹底ぶりである。だがその日から(八日ののち)、つまり一週間後の日曜日、トマスは愛されていた主は、彼が弟子たちと一緒にいた所に再びご自身を現された。そして、トマスの言葉を聞いていたかのように、傷のある手と脇を示され、「さし入れてみなさい」と仰せられたのだ。

その場になくても、トマスの言葉を知っておられた主は、現代人の言葉もまた聞いておられる。処女懐胎や復活などは、初代教会の創作物語だと豪語する人たちの言葉だけではない。苦難にあつたとき、本当に神はおられるのかと不信仰になる私たちの嘆きの言葉も主は聞いておられる。そんな愚か者であっても、主は愛しておられる。そんな者でも主イエスが救い主であることを信じられるように、時には奇跡的なことをなされる。目に見えなくても、主は今も生きておられるからだ。

三、見ないで信じる者への愛

不信仰なトマスも、自分の言葉を全部ご存知の主イエスが、目の前に立っておられるのを見たとき、もはや信じないわけにはいかなかった。実直な性格の彼らしく、「わが主よ、わが神よ」と叫んだのである。彼は主の前にひれ伏し、目に涙を浮かべてそう言ったのではなからうか。そんな彼に主は言われた。「見ないで信じる者は、さいわいである」と。これは、トマスへの叱責(しせき)の言葉というだけでなく、将来、弟子たちの宣教によって主を信じる者たちについての励まし(しげ)の言葉であろう。主は、見ないで信じる人々を愛される。

この時から一か月余り後、主は昇天されて肉眼では見えなくなる。だがトマスをはじめとする弟子たちは、このお方が救い主であると大胆に宣教するようになるのだ。目に見えない主を信じることはどれほど難しいことか、彼らは自分の経験からもよく知っていた。しかし、彼らが宣教するとき、多くの人々が見ないで信じたのである。ペテロはそれらの人々に宛てた手紙に、「あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している」と記している(1ペテロ1・8)。このような素晴らしいわざが起こるのは、来月から学ぶ聖霊の働きのゆえにほかならない。

結論

トマスは、現在も教会の内外にあふれている不信仰な人々の代表である。しかし、主はそういう人々をも愛しておられる。彼らが、見えない主イエスを信じることができるように、祈り求めよう。

研究資料

(木村)

テキスト

24 デドモと呼ばれているトマス 本書中、他の個所では、忠実で勇敢、率直にものを言う弟子、しかし悲観主義的な弟子として描かれているが(11・16、14・5)、ここでは懷疑主義の代表のように描かれている。

25 ほかの弟子たちが…言う 未完了時制は、繰り返し証言し続けていたことを表している。その手に釘あとを見… トマスがこう言うのは、弟子たちが、復活のイエスの手と脇に傷跡があるのをはつきり見たと語っていたからである。足について一言も触れていないが、「わたしの手や足を見なさい」(ルカ24・39)というイエスご自身の言葉より、足にも釘跡があったことは間違いない。

決して信じない 二重否定による、非常に強い否定の言葉である。復活の場面に一人居合わせなかったトマスは、イエスの復活に対する不信仰とともに、弟子たちの証言に対する懷疑に陥っていた。そして、物的証拠がない限り信じようとしないうトマスであるが、トマスだけが不信仰であったわけではない(ルカ24・11)。もし一緒にいたならばトマスも信じていたことであろう。なぜ不在であったのかその理由は不明であるが、とにかく神の不思議な計画によってトマスだけ不在であり、それによって新約聖書において偉大な信仰告白の一つが生まれることになったのである。

26 八日のち ユダヤでは起点となる日も含めて数える(日本の「数え年」と同じ。使徒信条に

「三日目に死人のうちよりよみがえり」とあるのも、金、土、日と数えるから)。それゆえ、「一週の初めの日の夕方」(19節)から1週間後の日曜日のことである。このように2週にわたって日曜日にイエスが顕現されたことより、初代教会は、週の終わりの土曜日ではなく、週の初めの日曜日を主の日として守るようになっていった(1コリント16・2、黙示録1・10)。**イエスがいってこれ** 復活のイエスのからだは、さわることでできるとともに、戸を閉め切った部屋の中に現れることもできた(詳細は翌週13日研究資料)。

27 トマスに言われた イエスがこのように言われたのは決してトマスに対してだけではなく(ルカ24・39)。「イエスは、御自分から進んで、トマスの要求する通りに、御自身を試験して貰おうとされたのである。イエスが、御不在の間に、トマスが語った事を知っておられたという事実は、超自然的な知識を持っておられることを証明するに足るものであったし、またトマスの条件通りに進んで従われた、その謙虚と同情とは驚く外はないのである」(M・C・テニイ)。

28 わが主よ、わが神よ イエスこそ真の主、真の神であり、私はその僕に過ぎないという信仰告白である。「主」とは、復活して神と共に永遠に支配されるイエスに対する呼称である(使徒2・36、ローマ10・9、ピリピ2・11)。イエスの神性は本書冒頭から宣言されており、イエスは神の御子、救い主と呼ぶ個所は多いが、イエスは神であると呼ぶ個所は極めて少ない(ヨハネ1・1、18、テトス2・13、ヘブル1・8、1ヨハネ5・20)。ユ

ダヤ人にとって誰かを「わが主よ、わが神よ」と呼ぶことは信じ難いことであった。ユダヤ教は厳格な一神教であり、誰かを神格化することは目に見えない真の神への冒瀆とみなされたからである(10・33)。しかし復活のイエスの栄光に圧倒されたトマスは、「わが主よ、わが神よ」とひざまずくにはいらなかった。トマスはイエスにさわるまでもなく、見ただけで信じた。トマスの信仰告白は、本書に記されている個人的信仰告白の最後であるとともに頂点である。本書は、読者たちもトマスのように明確な信仰告白へ導かれるようにとの目的をもって執筆された(31節)。

29 わたしを見たので信じたのか 復活のイエスを見て信じたのはトマスだけではない。「もうひとりの弟子」もそうであった(8節)。見ないで信ずる者は、さいわいである やがてイエスは昇天され、もはや誰も肉眼では見ることでできない存在になろうとしている。それゆえこの言葉は、トマスに対する戒めだけでなく、イエスの昇天後、直接見たことはないが、弟子たちの証言や聖書によって、イエスを救い主と信じる者たちへのチャレンジでもある(ヨハネ17・20、20・31、1ペテロ1・8)。今や信仰は見るることによってではなく、「聞くことによるのである」(ローマ10・17)。

参考図書 村瀬俊夫『ヨハネの福音書』『新聖書注解 新約1』(いのちのことば社)、M・C・テニイ『ヨハネによる福音書』(聖書図書刊行会)、D.A.Carson『The Gospel According to John』(Eerdmans) 他

聖書 ヨハネ20・24、29

タイトル トマスよ

暗唱聖句 見ないで信ずる者は、さいわい

である。ヨハネ20・29

目標 とまどうトマスにもあらわれて

くださった主の愛にこたえよう。

疑り深いトマス (大頭)

先週は、復活されたイエス様が弟子たちのいる部屋に入って来られ、弟子たちが主を見て喜んだことを学びました。ところがその弟子たちの集まりに一人欠けている人がいたのです。それは、疑り深い人トマスです。ほかの弟子たちから、よみがえったイエス様にお会いしたと聞いても、信じませんでした。そして「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」と言いました。「みんなのようには信じないぞ」という意味です。けれども、トマスはイエス様にお会いしたくなかったのではなく、トマスもほかの弟子たちと同じようにイエス様にお会いしたかったのです。

トマスに現れたイエス様

8日経ってイエス様は、もう一度弟子たちのところに現れました。ほかの弟子たちは、もうイエス様にお会いしていましたから、今度はトマスのために特別に来てくださったのです。トマスは見ました。イエス様です。自分の目をこすって何度も見直しました。やっぱり本物のイエス様です！

トマスのために十字架にかかって死んでくださったイエス様がトマスの目の前に立っておられるのです。その証拠に、ほら、両手には見るだけで痛い傷が深く残っています。イエス様は、トマスが先に言っていたように、「自分の手でわたしの手の釘あとにあなたの指を差し込んで確かめなさい。手を伸ばして、わたしのわき腹の傷にさわってごらんなさい」とおっしゃいますが、とんでもない。トマスの目はもう涙でいっぱいです。

信じる者になりなさい

イエス様は、「信じていない者にならないで、信じる者になりなさい」と優しくトマスを諭されました。トマスは弟子たちや女の人たちの証言を全く信じないで、疑い深く頑固な自分のことをとても恥づかしく思ったに違いありません。復活のイエス様に一人だけ会えなかったことで、寂しかったのかもしれません。そんなトマスのことを、イエス様は全部ご存じでした。イエス様はトマスを見捨ないどころか、トマスがはつきりと信仰告白ができるようにしてくださいました。周りの弟子たちや女の人たちみんなが信じているから私も信じると言ったわけではありません。トマスは心から不信仰な自分を悔い改め、イエス様に「あなたこそ私の主です。あなたこそ私の神です」と心から告白したのでした。するとイエス様は、「あなたは見たので信じたのですか。見ないで信じる者はもっと幸いです」とおっしゃいました。

升崎先生のお父さんに現れたイエス様

升崎先生はお坊さんになるための修行をしていた16歳のとき、イエス様を信じました。明治時代

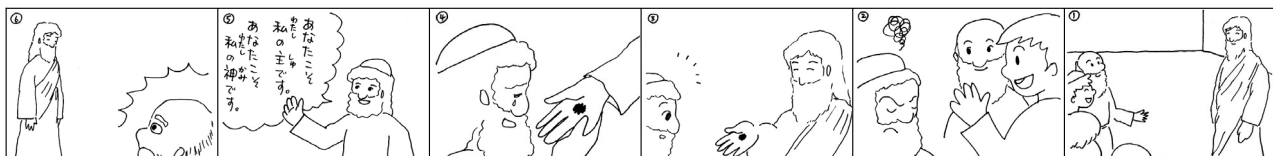
のことです。仏教に熱心だったお父さんはとても怒って竹刀でたたいたり、裸にして氷の上に投げ飛ばしたりしました。何とかイエス様を信じることをやめさせようとしたのです。でも升崎先生は牧師になりました。お父さんはキリスト教に反対するために何度も何度も聖書を読みました。そして、イエス様は神の一人子だとわかりました。お父さんはイエス様にお会いしたいと思いました。でもどうしたらよいのかわかりません。寒い2月。65歳のお父さんは21日の間、断食をしながら滝に打たれ、「キリストが本当に神なら姿を現してください」とお祈りすることにしました。最後の21日めに、お父さんの目の前に白い衣を着たイエス様が来てくださったのです！71歳で亡くなったお父さんの最後の言葉は「外彦、外彦、出雲へ帰れ、ヤソ（イエス様）のために働いて死ね、ヤソのために働いて死ね」でした。

トマスの願いに答えてくださったお姿を現してくださったイエス様は、升崎先生のお父さんの願いにもお応えくださいました。イエス様にお会いするために断食や冷たい滝に打たれる必要はありません。けれども、イエス様にお会いしたいと願う熱心な祈りには、イエス様は答えてくださったのです。

まとめ

イエス様は、なかなか信じようとしなかったトマスをも愛して、信じるように導かれました。私たちは今、肉眼でイエス様を見ることはできませんが、イエス様のお言葉に従って、聖書のみ言葉を素直に信じる者になりましょう。

♪我らの主にむかって♪ (プレイズワールド33)



聖書 ヨハネ20・11～18 テーマ マリヤよ

序論

(鎌野)

今週は、先週のトマス事件より前に起こった出来事を学ぶ。四福音書は異口同音に、復活された主イエスと最初に会ったのは、12弟子ではなく、女たちであったと記録している。しかも4つともマグダラのマリヤの名前を明記しているのだ。ヨハネ福音書は、彼女だけが墓に行ったように描いているが、実際は複数の女性がいた。ちなみに本章2節の末尾は、原語では「私たちにはわかりません」となっている(新改訳・新共同訳参照)。ヨハネは、彼女の主イエスに対する愛を強調するために、彼女の証言を中心にしてこの部分を書いたのだろう。ヨハネ自身も彼女の知らせを受けて墓に行ったのだが、主にお会いする前に家に帰っていることにも注目したい(前段落に登場する「もうひとりの弟子」とはヨハネのこと)。彼女の行動を精査し、主への愛の姿を明らかにしよう。

一、マリヤは見た

墓の入口に置かれていた石がとりのけてあるのを見たマリヤは、それをペテロとヨハネに報告した。二人は急いで墓に行き、墓が空であることを見る。しかし「彼らは死人のうちからイエスがよみがえるべきことをしるした聖句を、まだ悟っていないかった」(9節)。二人が帰っても、マリヤだけはそこに残り、泣きながら、身をかがめて墓の中をのぞくと、白い衣を着たふたりの御使が…す

わっているのを見た」。さらに、「うしろをふり向くと、そこにイエスが立つておられるのを見た」。このように彼女は(ペテロ・ヨハネと同様)幾つかの事実を見たが、主が復活されたことを悟ることができなかった。ただ見るだけでは、必ずしも主の復活を信じる理由にはならないのだ。

二、マリヤは悟った

そこで主はマリヤに、「女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか」と尋ねられたが、彼女は主を園の番人と思いこんでいた。けれども主が、「マリヤよ」と彼女の名前を呼ばれたとき、初めてこの人物が主イエスご自身であることを悟ったのである。自分の名前を知り、そのように呼びかけてくださるお方は、主イエス以外にないことに気付いたからだろう。主は良い羊飼いである。そして主は「自分の羊の名をよんで連れ出す。…羊はその声を知っているで、彼について行く」(10・3～4)。マリヤは、主の呼び掛けの声に、このお方の愛を感じたのだ。そして、彼女もまた、「ラボ二」と呼び掛け、主に応答したのである。

しかしその直後の主の言葉に注意しよう。主は、「わたしにさわってはいけない」と仰せられた。トマスに対して「わたしのわきにさし入れてみなさい」と言われたのとは対照的である。復活された主は霊のからだであった。それは昇天に備えての栄光のからだであり、以前の主のからだとは違っていた。主は、「昔のわたしにしたような接し方をしてはならない」と教えられたかったのだろう(レオン・モリス著『ヨハネ福音書』[英文])。

今でも多くの人々が、「神を見せる。そうしたら信じる」と言う。けれど、たとい主イエスがこの時代に現れ、ご自分の姿を示されても、彼らは信じないだろう。主を見ただけで、主の復活を信じることはできない。主の愛を知った者こそ、主の復活も昇天も信じることができるのである。

三、マリヤは伝えた

さらに主はマリヤに、「わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く」と、彼らに伝えなさい」と命じられた。人間の情から考えると、マリヤは復活の主と共にいたかったに違いないが、主の命に従って、「弟子たちのところに行つて、自分が主に会ったこと、…自分に仰せになったことを、報告した。主の愛を知っている者は、主のみ言葉に従う。そして自分の見聞きしたことを喜んで伝えるのである。

主を愛している者は、主が今も生きていて自分を愛しておられることを実感している。だから、たとい主が目で見えなくても、このお方が救い主だと伝えていくのである。トマスもマリヤも、そして来週学ぶペテロも、復活の主にお会いした者たちはみな、そのことを伝えずにはおれなかった。

結論

私たちは主を肉眼では見ていないが、私たちのために犠牲となられた主の愛を経験している。だから主の復活も自然に信じられるのだ。だからこそ、このことを人々に伝えていくのではないか。

研究資料

(木村)

復活のイエスがそのお姿を最初に現されたのは、十二弟子に対してではなく、マグダラのマリヤに対してであった。

テキスト

11~13 マリヤ マグダラのマリヤのこと(20・1、18、19・25)。彼女は早朝真つ先に墓に駆けつけ、ペテロたちに墓をふさぐ石が取り除かれていることを報告すると、ペテロたちは墓に急ぎ、その中に入った(1~10節)。それよりかなり遅れて再びマリヤは墓にやって来た。**墓の外に立って泣いていた**マリヤはまだイエスの復活を信じていなかったの
で、「だけれど、主を墓から取り去りました」としか考えられず(2、13節)、悲しみに暮れていた。**身をかがめて墓の中をのぞくと** マリヤは墓の外から中をのぞいただけで、ペテロたちのように中には入らなかった(6~8節)。するとそこに、**白い衣を着たふたりの御使が…すわっているのを見た**マルコは「真白な長い衣を着た若者がすわっている」(16・5)と記し、ルカは「輝いた衣を着たふたりの者が、彼らに現れた」(24・4)、マタイは「その姿はいなずまのように輝き、その衣は雪のように真白であった」(28・2~3)と記している。それでもなおマリヤが、「これを見て信じた」(8節)ペテロたちのように信じていることができずに泣き続けていると、御使いは、**なぜ泣いているのか**と優しくたしなめた。**女よ(ギユナイ)** とは、女性に対して軽蔑した呼びかけではなく、むしろ礼儀正しい呼びかけである(マタイ15・28、ルカ13・12、ヨハネ4・21、8・

10、19・26、20・13、15)。**わたしの主** イエスこそ真の主、私はその僕(しもべ)という信仰告白に基づく表現。**14~15 気がつかなかった** 悲しみと失望の涙で霊の目が曇っていたからか。エマオ途上の弟子たちも、「ちがった姿で御自身をあらわされた」(マルコ16・12)イエスを、「目がさえぎられて…認めることができなかった」(ルカ24・16)。ガリラヤ湖畔でも「それがイエスだとは知らなかった」(ヨハネ21・4)。復活のイエスのからだは、さわることででき(ヨハネ20・27、ルカ24・39)、受難の傷跡が残ったままであった(ヨハネ20・20、25、27)。魚を料理し(ヨハネ21・9)、それを食べた(ルカ24・41~43)。亜麻布をすり抜けて復活し(ヨハネ20・6~8)、家の戸を閉め切った部屋の中に現れた(ヨハネ20・19、26)。**あなたが** 原文では強調されていて、他でもない「園の番人」のあなたが、の意。**わたしが** 原文では強調されていて、他でもないこの私が、の意。

16 マリヤよ(マリヤム) これまで幾度となく耳にしたアラム語による懐かしい呼びかけによつて、その声はイエス以外の誰(だれ)でもないことに気づいた。ちょうど羊が羊飼いの声を知っているように(ヨハネ10・3~4)。**ラボニ** アラム語で、先生、の意(マルコ10・51)。

17~18 さわって(しがみつく、すがりつく、の意)はいけない 現在時制であるから、「さわってはいけない」ではなく、むしろ「さわってはいけない、すがり続けてはいけない」。「わたしがそのかたを引き取ります」と言っていたマリヤは、イエスであることがわかると、もうどこにも行っ

てほしくないという思いからか、すでにイエスにすがりついていたのであろう。他の個所では、復活のイエスはマリヤたちが「み足をいだいて拝」するのを許された(マタイ28・9)。トマスには「あなたの指をここに付けて…手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい」と言われた(ヨハネ20・27)。それなのになぜここでは禁じられたのか。それは、マリヤはこの時すでにイエスが復活されたことを信じていたから、すがり続けることを禁じられたのである。やがてイエスは「場所を用意しに行く」(ヨハネ14・2)ために、聖霊を注ぐために(ヨハネ16・7)、そして再び「迎え」に来るために(ヨハネ14・3)昇天され、以前のように目で見、耳で聞き、手でさわるといふ交わり(1ヨハネ1・1)はもはやできなくなることを教え、マリヤの衝動的な熱心を抑制するための禁止であったと思われる。**神であられるかたのみもとへ上って行く** 現在時制であるから、昇りつつある、昇天中、の意。復活によつて備えられた霊のからだは、肉のからだに伴う様々な制約から一切解放されて、実質的に昇天されたも同然であった。**わたしの父またあなたがたの父…わたしの神またあなたがたの神** イエスを信じるならば神の子とされ、イエスとは霊の兄弟関係に入れられるということである(ヨハネ2・12、ローマ8・15~16、ヘブル2・11~12)。
参考図書 村瀬俊夫「ヨハネの福音書」『新聖書注解 新約1』(いのちのことば社)、榎原康夫「ヨハネ福音書講解 上巻」(小峯書店)、
D.A.Carson「The Gospel According to John」(Eerdmans) 他

聖書	ヨハネ 20・11～18
タイトル	マリヤよ
暗唱聖句	イエスは彼女に「マリヤよ」と言われた。ヨハネ 20・16
目標	マリヤのように主を愛する者となるう。

マグダラのマリヤ (大頭)

聖書にはたくさんマリヤが出てきますが、このマリヤはイエス様から7つの悪霊を追い出してもらったマグダラのマリヤ（ルカ8・2）です。聖書には悪霊につかれた人がたいへん苦しんだ様子が書いてあります（ルカ8・29）。ある日、そんなマリヤのところへイエス様が来てくださいました。そして、マリヤを悪霊から自由にしてくださいました。マリヤの毎日から苦しみと悲しみが無くなりました。イエス様がマリヤのことを姉妹と呼んでくださったのですから。そして、イエス様だけでなく兄弟や姉妹と呼び合える本当の仲間がたいてきえたのです。だからマリヤはイエス様を愛していました。いつまでもおそばにいたいと思っていたのです。

イエスさまを探すマリヤ

イエス様が復活なさった朝、ペテロやヨハネやほかのマリヤたちは空のお墓を確かめた後帰ってしまいました。マリヤはただ一人、イエス様の葬られていた空っぽのお墓のそばに一人で立って泣いていました。イエス様が十字架で死なれた時には、マリヤは自分も死んでしまいたいと思ってい

ました。せめて、葬られたイエス様の、そばにいたいと思いました。だからマリヤはイエス様のお墓まで来たのに、イエス様のお体がないことがわかったので泣き出してしまったのです。

そして、泣きながらも一度お墓の中をのぞいてみました。すると、そこには白い衣を着た御使いが、一人はイエス様のお体があった頭の方に、もう一人は足の方に座っており、マリヤに「なぜ泣いているのですか」と尋ねるのです。マリヤは「誰かが私のイエス様を取り去ってしまいました。イエス様の亡骸がどこにあるのかわからないのです」と答えました。マリヤには、イエス様が約束どおり復活され今も生きておられることが想像もできなかったのです。

マリヤを呼ぶイエス様

そして、後ろを振り向くとイエス様が後ろに立っておられました。しかしマリヤの目は涙でいっぱいだったので、それが誰なのかはつきり分かりませんでした。するとその人は「なぜ泣いているのですか」と聞くので、マリヤは「もしあなたが、イエス様のお体をどこかに移したのなら、私が引き取りますから、どうか、どこに置いたのか教えてください」と言いました。おかしいことに、マリヤは大好きなイエス様が後ろにおられることに気がつきませんでした。イエス様に話しかけられた時でさえ、気づかなかったのです。本当に悲しい時はこんなことがあるものです。でも、イエス様が「マリヤ」と呼ばれたとき、すぐにそれがイエス様だとわかりました。愛って不思議ですね。愛してくれる人の声には愛がこめられています。

だから呼ばれるとすぐにわかるのです。マリヤは振り向いて「ラボニ（先生）」と呼び返しました。イエス様に抱きつきたいと思ったのです。

さわってはいけない！

マリヤの愛はイエス様を喜ばせました。けれども、マリヤの愛はイエス様大好き、イエス様にいつも、いつまでもそばにいてもらいたい、という小さな子どものような愛でした。イエス様は、マリヤの愛が成長しなければならぬことを「存じでした」。イエス様は天に昇らなければなりません。その後、マリヤたちは地上に残り、イエス様の十字架と復活の事実をみんなに伝えていくのです。マリヤはイエス様のお気持ちに今度ばかりわかりました。もうマリヤの目には涙はありません。イエス様のお仕事をするマリヤは今までは違ってた力強さにあふれています。マリヤの最初の仕事。それは、まず弟子たちのところへ行って、自分がイエス様に会ったこと、そして、イエス様が「わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く」とおっしゃったことを伝えることでした。

まとめ

イエス様は、マリヤの愛をよく「存じでした」。ですから、マリヤには特別に「対一」で自分の生きておられることを教えられたのです。マリヤは他のお弟子さんたちとは違った証で、イエス様の復活を伝えることができたのです。私たちもイエス様を心から愛して、イエス様の生きておられることをみんなに伝えよう。

♪イエスは愛で満たす♪
(新聖歌 208)



聖書 ヨハネ21・15～19
テーマ ペテロよ

序論

(鎌野)

マタイとヨハネは、復活の主がエルサレムだけではなく、ガリラヤでもご自身を現されたことを記している。ヨハネは特にこのことを詳述するが、それは初代教会の重鎮だったペテロと自分の使命を明確に示すためだったと思われる(20節の「イエスの愛しておられた弟子」とはヨハネのこと)。今週はこのペテロに焦点をあて、彼と主イエスの愛の関係を学んでみたい。ここで主がペテロに三度も同じ質問をされたのは、ペテロが主を三度否認したことで無関係ではない。主は大きな失敗をしたペテロさえも愛し、彼がその主の愛に応答して生きるように教えられたのである。ペテロはこの出来事を通して、三つのことを明確にした。

一、明確な告白

主がここで、「わたしを愛するか」と尋ねられたのには大きな意義がある。「わたしを信じるか」でも「わたしを礼拝するか」でもなかった。主への愛こそが、これからのペテロの歩みの動機となるべきだった。「愛する」のギリシャ語が、最初の2回はアガパオーであり、最後がフィレオーであることは、余り大きな問題ではない。主はギリシャ語ではなく、アラム語で語られていたからである(ヨハネは他の個所でもこの2語を同義的に用いている)。大切なのは、「この人たちが愛する以上」との一句だろう。ペテロは主を否認する直前に、「たとい、みんなの者があなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」(マタイ26・33)と、自分が他の弟子より忠実であると高ぶっていた。だが失敗して自分の弱さを知った彼は、「わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」と答えるだけで、他の弟子と比較してはいない。

今も主は私たち一人一人に、「あなたはわたしを愛するか」と尋ねておられる。他の人ではない。「あなたは」である。その問に対して、明確に「私はあなたを愛します」と答えられるだろうか。「こんな罪人の私のために死んでくださったあなたの愛に答えて、私は生涯、あなたを愛し通します」と告白するとき、主は最も喜ばれるのである。

二、明確な使命

その告白を聞いて、主は「わたしの小羊を養いなさい」、「わたしを飼いなさい」、「わたしを養いなさい」と言われた。多少の表現の違いはあるが、良い羊飼いだである主が、ご自身の使命をペテロに委託されたことは明確である。3年ほど前、ガリラヤ湖畔で「人間をとる漁師にしてあげよう」(マタイ4・19)と召された主は、新しい比喻で彼の使命の内容を示された。魚は捕るだけで良いかもしれないが、羊(特に小羊)の場合は、長い時間をかけて養わねばならない。自らを犠牲とすべき時もある。後年、「あなたがたにゆだねられている神の羊の群れを牧しなさい」(1ペテロ5・2)と記したとき、ペテロは自分の使命がどれほど重要かをかみしめていたことだろう。

主は、今日の私たちにも同じ使命を委ねておられる。教会学校教師であろうとも「牧羊者」なのだ。小羊のために祈り、日曜ごとに彼らの名を呼んで「緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴っていく明確な使命がある。主を愛しているなら、この使命は大きな喜びとなるのではなからうか。

三、明確な服従

さらに主は、「ペテロがどんな死に方で、神の栄光をあらわすか」さえも彼に示された。晩年には自分の行きたくない所にさえ連れて行かれるようになるが、それによって神の栄光が現されるのである。確かに彼は、「わたしに従ってきなさい」とのみ言葉に応答して、死に至るまで明確に服従し続けた。伝承では、彼はローマで逆さ十字架につけられて殉教したと言われている。しかし、そのような殉教者の血によって、福音はローマ帝国の隅々にまで伝えられたのである。

愛は「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」(1コリント13・7)。主を愛するなら、弱い私たちでも苦難に立ち向かっていける。福音を伝えることは決して楽なことではないが、復活され、今も生きておられる主に従っていけばいいのだ。その時、苦難を乗り越える喜びが与えられることを忘れてはならない。

結論

主はトマスも、マリヤも、ペテロも愛された。そして、それぞれに最適な時にご自身を現され、彼らを教えられたのだ。現在の私たちにも、復活の主はみ言葉を通して教えてくださるのである。

研究資料

(足立)

イエスを裏切り、元の職（漁師）に戻ろうとしていたペテロに対して、主は湖畔で彼と語られた。そして主はペテロに、ご自分を愛しているかどうかを三度尋ねられた。その会話は次のように結論づけられている。すなわち、イエスは自分の質問の中で「愛する」（アガパオー）という動詞を2回繰り返して使っている（21・15、16）。ペテロはその答えの中でその都度「愛する」（フィレオー）と言う動詞を用いている（21・15、16）。そしてイエスは三度目の質問の中で、ペテロが使った「愛する」（フィレオー）と言う言葉を用いた（21・17）。ペテロもまた、彼の答えの中で「愛する」（フィレオー）を用いている（21・17）。

ギリシャ語として、アガパオーは、人の功績とは全く無関係に与えられる愛を意味する動詞である。一方フィレオーは、友情という愛を意味する動詞である。つまり男性が男性の友人に対して示す愛であり、女性が女性の友人に対して示す愛である。しかしヨハネ21・15、17で大切な点は、動詞の相違にあるのではないと考えられる。本福音書において著者ヨハネは、アガパオーとフィレオーとを相互交換可能な動詞として使っている事例が多い。i「父は御子を愛して」（アガパオー）（3・35）。ii「父は子を愛して」（フィレオー）（5・20）。iii「あなたが愛しておられる者が病気をしています」（フィレオー）（11・3）。iv「イエスは、マルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた」（アガパオー）（11・5）。v「愛弟子」（アガパオー）（19・

26）。vi「イエスが愛しておられた、もうひとりの弟子」（フィレオー）（20・2）。このように並べてみると、iとii、iiiとiv、vとviは同じ意味を示しているのに、用語としては「アガパオー」と「フィレオー」とが使われている。つまり著者ヨハネは二つの動詞が持つ意味の相違を十分知りつつも、明確に使い分けているとは言えない。したがって、21章においても文体論（修辭的な意味）から同じ言葉の反復を避けたと考えられ、意味上の問題ではないと考えられる。

それではテキストが意味することは何であろうか。それは、イエスが徹底して「愛」に関して語りかけている事実にある。弟子たちの間では、ペテロがイエスを三度否定した事実は十分伝わっていたであろう。当然ペテロのリーダーとしての立場は、あやういものであったと推察される。またペテロ自身、自分が弟子たちの長として生きることに矛盾やためらいを感じていたであろう。しかし主は、ペテロに対して他の弟子たちの前で、主への愛を三度問い、三度「愛する」という答えを導き出している。これはペテロの弟子の長としての地位回復を意味している。そしてイエスはペテロに、三度「羊を養う」ことを委託し、彼の立場を保証している。イエスはペテロに、勇氣、福音理解、指導力、能力等を問うてはおられない。ペテロが使徒として生きていく上で最も重要な課題は、主を愛するかどうかと言う一点にあった。

テキスト

15、17 イエスはペテロとは言わず、「ヨハネの子

シモンよ（参照ヨハネ1・42）」と三度呼びかけておられる（21・16、17）。「あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」。これは原文では三通りの解釈が可能である。i。あなたはこれらの人が愛する以上にわたしを愛するか？ ii。あなたはこの人たちが愛する以上にわたしを愛するか？ iii。あなたはこれらのこと（舟、魚）以上にわたしを愛するか？ ペテロはかつてイエスに、「たとい、みんなの者があなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」（マタイ26・33）と傲慢な約束をした。このことから考えると、iが意味するところであろう。

「存じます」とペテロはイエスに三度返事し、三度目には「おわかりになっています」とまで言っている。「存じます」と訳されている（オイダ）言葉は、事実を知情的に知ることを意味する動詞であり、「おわかりになっています」と訳されている（ギノースコー）という言葉は、経験を通して得る知識を意味する動詞である。しかしここでもヨハネが、意味の変化を持たせるために言葉の使用を変えたとは考えにくい。やはり重要なことは以下のことであろう。すなわち、人々の心に何があるかをイエスが十分承知していることをペテロは自覚していると言うこと。

18、19 主が、ペテロの死に方を予告したと思われる。

参考図書

Carson, D.A., The Gospel According To John, Erdmans, Morris, L., Reflections on the Gospel of John, Baker.

聖書 ヨハネ21・15～19

タイトル ペテロよ

暗唱聖句 ヨハネの子シモンよ、わたしを

愛するか。

ヨハネ21・17

目標 復活の主を心から愛する愛を求めよう。

ペテロの悲しみ

(大頭)

イエス様が十字架にかかってしまわれてからというものの、ペテロは元気がありません。もちろんよみがえられたイエス様にお会いしたときは、ペテロもみんなと一緒に本当に喜びました。けれども、やっぱりあのイエス様が十字架にかられる前の夜のことを思い出してしまうのです。あの夜、ペテロはイエス様に「あなたのためにはいのちも捨てます」と言いました。けれども、イエス様が捕らえられたとき、他の人から3回、「イエス様の弟子だろう?」と聞かれました。ペテロは怖くなつて、思わず3回とも「イエス様など知らない」と言ってしまったのです。ペテロは裏切り者です。「イエス様を見捨てて、イエス様を一人で死なせてしまった」と思うと、涙が止まりません。自分には弟子の資格などないと思うと、もう生きていても何の楽しみもないような気がするのです。

ヨハネの子シモン

よみがえられたイエス様は、ガリラヤ湖で漁をしていた弟子たちの前に再び現れ、朝食の後、イエス様はペテロに初めて会ったときと同じように「ヨハネの子シモンよ」と話しかけました。アン

デレに連れられて初めてイエス様に会ったとき、「あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケバ(訳せば、ペテロ)と呼ぶことにする」、そうイエス様はおっしゃいました。以来ペテロと呼ばれることを誇りにしてきたペテロ。でも十字架の夜…。今、ペテロはまるであの初めてイエス様に会った輝く日の再現のように、イエス様の前に立っています。イエス様の唇が動いて懐かしい声が「あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか?」ペテロは思いました。「ああ、主よ。私は、誰よりもあなたを愛していると思っていました。でも十字架の夜…。ペテロは、自分が当てにならない人間であることを知っています。他の弟子たちより愛しているなどと言うことができません。言いたいとも思いません。では、愛していないのか?それは違う。ペテロはやっぱりイエス様を愛しているのです。やっとペテロは言いました。「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」。十字架の夜以来、初めてペテロは「イエス様愛します」と言うことができました。ペテロがイエス様に言いたくてならなかった一言、けれども自分にはそんなことを言う資格がないと思っていた一言を、イエス様が言わせてくださったのでした。すると、イエス様はペテロに「わたしの小羊を養いなさい」と言われました。

三度ペテロに

イエス様はまた同じ質問をされました。「ヨハネの子シモンよ、あなたはわたしを愛するか」。ペテロはさつきと同じようにもう一度、「主よ、そうです。私があなたを愛することはあなたがご存じで

す」と答えました。イエス様は「わたしの小羊を飼いなさい」と言われました。それからイエス様はもう一度同じ質問をされたのです。三度、それはあの夜ペテロがイエス様を裏切った回数です。イエス様が、お尋ねになる度にペテロの心は痛みました。痛み?そうです。けれども、それは新しく傷がつけられて痛む痛みではありませんでした。ペテロの心の奥深くに刺さつてうずいていたトゲが抜かれるときの心地よい、ほっとする痛みでした。尋ねられる度に、ペテロは「私はあなたを愛します」とイエス様に言うことができたからです。イエス様はご存じです。ペテロはあの夜もイエス様を愛していたのです。裏切りながらも愛していたのです。ペテロがその後どれほど苦しんだかもイエス様はご存じでした。ですから、イエス様はペテロのために来てくださったのです。そして、「わたしの羊を養いなさい。」「わたしに従ってきなさい」と、イエス様を愛して命をささげる働きに回復してくださいました。

何よりも主を

ペテロはその後、本当に立派に殉教の死をとげたのです。ペテロを造り変えたのは、イエス様の愛です。イエス様を裏切ってしまった弱いペテロであっても、なお愛して、もう一度信頼して、神様を愛する人々を養い育てる務めを任せてくださったのです。ペテロは、イエス様の深い愛にどんなに感激したことでしょう。私たちがたとえ臆病な者であっても、イエス様を愛するなら造り変えてくださり、神様の御用に用いてくださるのです。

♪ああ主の瞳♪

(新聖歌221)



聖書 使徒1・15-11 テーマ 昇天の主

序論

(鎌野)

福音書は主イエスの復活と昇天をもつて幕を閉じるが、それは肉眼で見ることのできたイエス・キリストの生涯を描くことがその目的だからである。その続きを記録するのが、今週から学び始める使徒行伝だ（来週だけは聖霊の働きを確認するためにヨハネ福音書を用いる）。ルカは、第一巻である福音書を書いた後、主が昇天後も聖霊として働いておられることを、続巻の本書で繰り返して述べている。だから本書は「聖霊行伝」とさえ言われる。今週は、復活と昇天と聖霊降臨が密接に関係していることを学んでみたい。

一、復活の意義

マタイ28・11-15にも記されているように、主の復活を作り話とする人々は当時からいた。これまで学んできたように、主と共に生活していた弟子たちでさえ最初は信じるのができなかった。また、復活後20年ほど経過した時にも、「死人の復活などはない」と言う人々が教会の中にもいた（1コリント15・12）。二千年後の今日、復活を否定する人々が多いのは当然すぎるほど当然だ。

しかし4つの福音書はすべて、主イエスの復活の出来事を明確に記している。中には矛盾したように思える箇所もあるが、それは4人が口裏を合わせず、自分が見聞きした情報から正直に書いたからにはかならない。（イエスは苦難を受けたのち、

自分の生きていることを数々の確かな証拠によって示し、四十日にわたってたびたび彼らに現れて、神の国のことを語られた」とルカは記す。自分は死んではないんだという事実を、弟子たちにも他の人々にも悟らせるために、主イエスは目に見える復活のからだで顕現されたのだ。復活された主は、確かに現在も生きておられる。

二、昇天の意義

だがこの期に及んでも、まだ弟子たちは（イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか）と尋ねていた。彼らは、目に見えるユダヤ国家の回復を望んでいたのだ。彼らは「神の国」が見える形で実現することを期待していたに違いない。確かに主は生きておられるが、目に見える形で存在されることは、かえって弟子たちに誤解を与えることになっていたのである。

天地を創造された霊なる神は、本来目に見えるお方ではない。ただ、神がどういうお方かを示すために、主イエスは「おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた」（ピリピ2・7）。主は、霊なる神の属性である遍在性（どこにでもおられること）と永遠性（いつまでもおられること）を、一時期放棄されたのである。

しかし、（イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった）。昇天は、かぐや姫のように単に天に上ったというのではない。主イエスが目に見えない本来の姿に戻られたことである。再び遍在性と永遠性をもたれ、父なる神の右の座につかれたのである。

三、聖霊降臨の意義

確かに主イエスの姿は肉眼では見えなくなった。だが、決しておられなくなったのではない。そのことを悟るまでに、弟子たちにはもう10日間の日が必要だった。だから主は、（エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい」と、聖霊が降臨することを明確にされ、さらに（聖霊があなたがたにくる時、あなたがたは力を受けて、わたしの証人となる」と仰せられたのである。聖霊は目には見えないが、主イエスの存在をはっきりと示されるお方である。「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ28・20）との主の約束は、聖霊の降臨によって実現するのだ。使徒行伝に記されている素晴らしい宣教の進展は、聖霊の力以外で説明することができないだろう。

しかし、（あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、…またおいでになる」と告げた御使いの言葉も忘れてはならない。それは、肉眼で主を見ることのできる「再臨の日」であり、神の国がこの地上において実現する日なのである。主イエスを「顔と顔を合わせて」見ることができこの日を、楽しみに待たない者があるだろうか。

結論

「復活の後、イエスはいつ死んだのですか」という質問を受けたことがある。主イエスは死なれていない。昇天されて、私たちのためにとりなしの祈りをしてくださっている。またこの地上においても、聖霊として共にいてくださるのである。

研究資料

(足立)

テキスト

3 主イエスの十字架の受難、復活、そして昇天に至る40日間の出来事は、四つの福音書及びパウロの手紙に記されている(参照1コリント15・3～8)。特にルカは福音書24・13以下においてイエスの復活後について詳しく記録している。この40日にわたる期間イエスは、**神の国**のことを語られた。神の国の宣教は、イエスのガリラヤ伝道に始まるもので(マルコ1・14～15)、主の到来において既に成就し、かつ実現しつつある福音の現れである(ルカ10・9、11・20)。この神の国の出来事を決定的にした出来事が、イエスが死人から復活した歴史的事実であった。使徒行伝における使徒たちの宣教内容も、主イエスの復活により神の国が実現したと行うことである(8・12、19・8、20・25、28・23、31)。そして神の国の福音には、キリストの再臨と審判も含まれている。

4 4～5節においてルカは、聖霊の降臨とバプテスマを力説することにより、生けるキリストに強調点をおいている。そしてこのことは福音伝達の前進と本質的に結びついている。復活された主イエスは弟子たちに、エルサレムを離れないで聖霊の降臨を待ち望むよう命令された。**父の約束**とは、父なる神がなさった約束であり、主イエスによって既に語られたメッセージである(ルカ24・49)。十字架前後においてもイエスは十分に語っておられた(ヨハネ14・16～21、26、15・26～27、16・7～15)。それはある意味で、イエスを拒絶し

た場所(エルサレム)が、新しくイエスを証し^{あかし}始めるところとなるためでもある。

5 イエスの約束は、バプテスマのヨハネの証言が想起されることにより、明確にされる(マルコ1・8、マタイ3・11、ルカ3・16)。そしていよいよ聖霊によるバプテスマに弟子たち一人一人が与る時が近づいたと、主は語られた。聖霊に満たされることこそ、福音宣教に携わる弟子たちが最も必要としている神からの祝福であり力であった。

6 ルカは3節で神の国に言及しているが、ここでは弟子たちがどういう理解を持っていたかを記している。彼らの関心は、主がいつイスラエルの国を再興するか否かに集約している。これはユダヤ民族の根底にある神への期待を示すものである。彼らにとつてはイスラエルが外敵(つまりローマ)から解放され、神の支配が政治的に実現し、他の民族がユダヤ人に追従することが昔からの願いであった。この点からして、弟子たちの福音理解はこの時点でも不十分だったと言える。

7 主は、彼らの問いかけを直接否定する形ではお答えにならない。しかし神がその目的を完成させる時は、父なる神だけがご存じであることを主張される(参照マタイ24・36、マルコ13・32)。

8 ここにキリストの証人がよって立つ、また使徒行伝全体を貫くテーマが明確に提示されている。これは主イエスご自身からの直接の委任である。事実これは昇天前に語られたイエスの最後のことばである。それ故、主の弟子たちはキリストを証する働きを成し遂げなければならない。ただし人間的な何かによってではなく、聖霊なる神の主権的な

働きによってである。そこには罪人の野心や野望は入り込めない。主イエスご自身の公生涯の始まりでさえ、聖霊なる神の注ぎから出発している(マタイ3・16、マルコ1・10、ルカ3・22)。使徒行伝においてこの1・8は、全体の内容区分も示している。エルサレム(2・42～8・3)、ユダヤとサマリヤ(8・4～12・24)、ローマに至る地の果て(12・25～28・31)。

9 主の昇天に関する記述は実に簡潔。大切な点は、弟子たちがイエス昇天の目撃者であった事実にある。既に弟子たちは40日間、復活の主の顕現に与っていた。そして昇天に及んでも肉眼ではつきり見た。雲は目に見える神の臨在と栄光を提示(参照、出エジプト40・34、マルコ9・7)。

10 見つけていた (アテニゾー)ということばは新約で14回出てくるが、そのうち12回をルカが用いている(ルカ4・20、22・56、使徒1・10、3・4、12、6・15、7・55、10・4、11・6、13・9、14・9、23・1)。昇天したイエスに代わって、白い衣を着た人が二人立っていた。これは天使のことである(参照ルカ24・4、使徒10・30)。

11 天使の役割は事実の説明を与えること。その内容の要点は二つ。①弟子たちが見ていたイエスは天にあげられた。②弟子たちが知っているイエスは、天にあげられた時と同じ有様で再臨される。

参考図書 齋藤篤美「使徒の働き」『新聖書注解・新約2』(いのちのことば社)、F.F.ブルース「使徒行伝」『聖書図書刊行会「Longenecker, R.N., The Acts of the Apostles」, The Expositor's Bible Commentary, Vol.9 (Zondervan), Marshall, I.H., Acts (IVP)。

聖書 使徒行伝1・11

タイトル 昇天の主

暗唱聖句

イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった。

使徒1・9

目 主の昇天の様子と再臨の約束を心に刻もう。

生きておられる主

(大頭)

イエス様が十字架にかかって死んでしまわれた時、お弟子さんたちはみんながっかりしてしまいました。でも、イエス様は、マリヤよ、トマスよ、ペテロよ、と何度も弟子たちにお会いくださいました。それは、悲しむお弟子さんたちに、はつきりとして自分が生きておられることをわからせるためでした。マリヤも、トマスも、ペテロもそれぞれいろいろと違うところがあります。けれども、それぞれにはつきりわかるようにイエス様は度々現れてくださったのです。みなさんも一人一人違います。けれども、イエス様は絶対一人一人に、「あつ、イエス様だ!」とわかるようにお会いくださいます。ほんとだよ!

父の約束

復活されたイエス様は弟子たちと食事をしているときに「エルサレムから離れないで、父の約束を待っていないさい」と命じられました。イエス様が残してくださった聖霊のバプテスマの約束です。バプテスマって知っていますか?バプテスマは、

イエス様を信じた時に受ける洗礼のこと。水につかったり、水を頭に注ぎますから、水のバプテスマです。でも、聖霊のバプテスマは、もうクリスチャンになつていている人が、聖霊を注がれる目に見えない2回目の洗礼です。聖霊のバプテスマを受けるまではそばにいてくださる聖霊が、聖霊のバプテスマを受けるときにその人の中に住んでくださるのです。

聖霊はキリストの御霊ともいいます。ですから、聖霊のバプテスマを受けることは、イエス・キリストが心の中に住んでくださることです。そばに

神の国

お弟子さんたちはイエス様に、「国を復興なさるのは、この時ですか?」と、とんちんかんことを聞いていました。復興というのは、ローマ帝国に占領されて苦しんでいたイスラエルの国を立て直すこと。イエス様がローマ軍を追いついて、イスラエルの王様になるだろうと期待していたのです。でも、イエス様がおっしゃった神の国は、この世の国ではありません。それは信じる人の心の中に始まって、どんどん他の人に広がり、そして最後には世界をおおってしまう、そんな目に見えない国のことでした。

見えなくなった主

イエス様は復活されて40日目、お弟子さんたちの見ている目の前から天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなっていました。神

の国のために働くように言いつけられたお弟子さんたちは、イエス様が死からよみがえられたとやっとなつたというのに、イエス様がいなくなつてしまふなんて、どうしたらいいのだろうと心配になつたでしょう。イエス様が何年も一緒にいてくださったときでも、臆病で、そのくせいばかりで、誰が一番偉いかと、そんなケンカばかりしていた弟子たちです。イエス様がおられないで、一体これからどうしたらよいのだろうか?と不安になつて当たり前でした。

またおいでになる主

ところが、彼らが天を見つめていると、白い衣を着た二人の御使いが彼らのそばに立つていて、「ガリラヤの人たちよ、なぜ、天を仰いで立っているのか。天に上げられたイエス様は、天に上つていられるのをあなたがたが見たのと同じように、またおいでになります」と告げたのです。

この知らせは、天に帰られたイエス様が、この世の終わりにもう一度地上に来てくださるといふ約束です。そのときこそ、私たちは本当に、顔と顔を合せてイエス様とお会いすることができるようです。待ち遠しいですね。私たちの罪をきよめて神の国に迎えるために、イエス様は十字架で死んでくださいました。今イエス様は、聖霊によつて私たちの内に住んでくださるのです。そして、イエス様が次に来られるときは、雲に乗つて天から迎えに来てくださるのです。私たちはこの約束を信じて、いつイエス様がおいでくださっても良いように備えていますように。

♪主イエスとともに♪(ふくいん子どもさんびか90)



聖書 ヨハネ16・1～15

テーマ 真理の御霊

序論

(鎌野)

ヨハネ福音書は、十字架刑の前夜の出来事を詳しく述べている。特に14～16章には、自分が去って行ったとしても、真理の御霊が来られるという主イエスの約束が、はっきり示されている。来週のペンテコステ礼拝を前にして、この聖霊の働きを確認しておきたい。今週の箇所から、聖霊は以下の3つのことをなさることがわかるだろう。

一、苦難に打ち勝たせる

前章の18節から、主が弟子たちに語られている内容は、次のようにまとめられる。「わたしを憎んで十字架につけようとしているユダヤ教の権力者たちは、近い将来、あなたがたをも憎んで、会堂から追い出したり殺したりするだろう。これまでわたしはあなたがたと一緒にいたから言わなかった。しかし今、父のみもとに行こうとしているので、あなたがたが憂えるとしても、あえて言う。〈わたしが行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう〉」。

主が去って行かれることは、弟子たちにとって辛いことだった。だが迫害によって散らされるとき、目に見える主イエスがすべての弟子たちと共にいることは不可能である。だからこそ主は、肉眼では見えないが常に共にいてくださる「助け主」

をつかわしてくださる。このお方、すなわち聖霊が共におられるなら、たといどんな苦難があろうとも、それに打ち勝つことができるのである。

福音が全世界に広がった現代なら、なおさら聖霊の働きは重要である。目に見える主イエスであるなら、世界中に存在する何億というクリスチャンと共にいることはできない。しかし聖霊は、どんな辺境の地にいる者とも、苦難の中にいる者とも、共にいてくださる。何と力強いことか。

二、世の人の目を開く

さらに聖霊は、〈罪と義とさばきとについて、世の人の目を開く〉。「世の人」とは、直接的には当時のユダヤ教の権力者たちであろうが、もつと広く、今日に至るまでの神を認めないすべての人々をも指すと解釈したほうが良いだろう。主を救い主と信じないことが罪であり、昇天は主が義なる方であることの証明であり、最後にはこの世の君であるサタンがさばかれることなどは、聖霊の働きなくして理解することはできない。

聖霊は、現代においても人々に働きかけておられる。そして、自分の罪に気付かせ、信仰によって義とされることを悟らせ、悪は必ずさばかれることを認めさせてくださるのだ。確かに「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことはできない」(1コリント12・3)。

三、あらゆる真理に導く

主が去って行かれると聞いた弟子たちは動揺しており、主の言葉の真意を理解することができな

いでいた。そんな弟子たちに主は、〈真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれる〉と仰せられる。その真理とは、〈きたるべき事〉、つまり十字架・復活・昇天の意義とその後の世界宣教・終末の出来事まで含めたすべての真理である。しかもその真理を、御霊自身が勝手に語るといのではない。御霊は〈わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせる〉のであり、さらに、〈父がお持ちになつていられるものはみな、わたしのものである〉と主は言われる。ここには、三位一体の神の統一したお働きが明記されている。

聖霊は、御子と御父と共に、聖書のみ言葉に基づいて働かれる。聖書に書かれていないことや矛盾することを語られるのではない。「聖霊によって示された」と言つて、その枠を越えることのないよう、十分注意する必要がある。〈御霊はわたし(キリスト)に栄光を得させる〉お方であり、決して人に栄光をもたらすのではない。

来週から学ぶ使徒行伝には、聖霊の著しい働きが記されている。そして今もその働きは続いているのだ。聖霊がくだる時、肉眼では見えないはずの主イエスがもつと身近になり、主の愛をもつと強く感じるようになる。さらに聖書に記されている真理が驚くほど理解できるようになるのだ。

結論

私たちには、聖霊が共にいてくださるとの確信があるだろうか。聖霊の助けなくしては、教会学校の奉仕はできるはずがない。自分の知恵ではなく、聖霊に寄り頼んで、祈りつつ歩み行こう。

研究資料

(足立)

イエスは弟子たちに彼らが受ける迫害や、必ず直面する困難について語られた(16・11～14)。この16章でヨハネは、「憂い、悲しみ」(ルペー)という言葉を4回使っている(16・6、20、21、22)。この言葉(ルペー)は、本福音書において他の章にはどこにも出てこない。しかしイエスは弟子たちが試みにあうことを伝えると同時に、彼らが受ける力の源、すなわち著しい聖霊の働きに關しても語っておられる。尚、時はイエスの十字架刑前夜で、告別説教(14・16章)の中である。

テキスト

5 けれども今 前述の内容とこれからの「それ」とが対照的であることを意味している。「だれもどこへ行くのか」と尋ねる者はない」とは、弟子たちの言葉を主が意識していたからだろう(13・36、14・5)。

6 イエスは弟子たちの心理状態を見抜いている。弟子たちの心が悲しみや「憂い」(ルペー)でいっぱいであるゆえに、彼らは主に尋ねられない。

7 助け主(聖霊)の派遣に關して、イエスは既に言及しておられる(14・16、17、26、15・26)。ここでは、イエスが去ることは弟子たちの「益」となり、彼が去ることで「助け主」が到来することが語られている。しかし聖霊が降臨するためには、イエスの死、復活、昇天、父なる神の右への着座を経なければならぬ。

8 イエスはここで、キリスト信仰者に対する聖

霊の働きを語られたのではない。むしろ未信者に対する御霊の働きにふれておられる。「世」(コスモス)とは、創造主なる神に敵対する被造の秩序である。世は徹底的に墮落している。そしてそこに住む「人の目を開く」のは、聖霊なる神のみわざである。「目を開く」と訳された動詞(エレンコー)は、簡単に翻訳できない言葉である。「その誤りを認めさせます」(新改訳)、「誤りを明らかにする」(新共同訳)、「まったく誤っていることを、はっきり示すであろう」(柳生直行訳)。聖霊なる神は、弟子たちがまったく予知できない方法でイエスが始めた伝道を拡大する。特に神を無視している世にその「罪」を、その「義」を、その「さばき」を自覚させるのである。

9 「罪」とは、イエスを信仰しない(受け入れない)世界を構成する人々のことである。もし彼らがイエスを信仰するならば、自分たちの罪に關してイエスのメッセージを受け入れ、彼に立ち返ったであろうに。しかし実情は、自分たちの不信仰によつて神に有罪宣告される(3・18、36)だけでなく、自分たちの真の必要を意志的に無視している。それ故、その誤りに気づかず助け主(聖霊)のみわざは恵みそのものである(使徒2・37)。

10 ここで言う「義」とは、イエスの十字架の死、復活、昇天、着座によつて実現されるものであった。申命記21・23から見れば、たいていのユダヤ人にとつて十字架上の死は、神の呪いの下にあることであつた(参照ガラテヤ3・13)。しかしイエスの十字架の死こそ罪を取り除く手段としての死であり、罪人が必要とし且つ成し遂げることがで

きない神の義を成就するものであつた。そしてイエスは復活、昇天により父なる神の右の座に着き、神の義が貫かれた救いを完成された。聖霊は罪人をこの義に導く。

11 この世の君 とは悪魔のことである(12・31)。**さばかれる** (ケクリタイ) という動詞は完了形の受動態で、そのさばきは神による永遠性のもを意味すると思われる。イエスの十字架の死と復活は決定的な大勝利である。聖霊はこのことを明らかにされる。

13 真理の御霊 (参照14・17)が弟子たちを「あらゆる真理に導く」とは、聖霊が教会を新しい異なる道に導くと言ふことではない。イエスご自身こそ真理である(14・6)。聖霊は神の真理(聖書)が意味するところを弟子たちに悟らせる。弟子たちはイエスが地上におられたとき、しばしば主のみ言葉を十分に理解していなかった(参照2・22、11・16、12・16、13・7、14・8)。しかし真理の御霊(聖霊)は、無理解な弟子たちにイエスが語った言葉の意味を明確にされる。

14 御霊はわたしに栄光を得させる とあるが、聖霊は父なる神、御子イエスに対立することは全くない。救いのみわざは三位一体の神による。聖霊はイエスとそのみわざ、その言葉を輝かす。

15 父なる神がもつておられる知識は御子イエスに属し、聖霊なる神はそれを弟子たちに知らしめる。

参考図書 Carson, D.A., The Gospel According To John, (Eerdmans).
Morris, L., Reflections on the Gospel of John, (Baker).

聖書 ヨハネ16:1-15
 タイトル 真理の御霊
 暗唱聖句 真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。ヨハネ16:13
 目標 真理の御霊を求めよう。

導入 (松浦み)

四月はよみがえられたイエス様に出会った人々について学んできましたね。イエス様は一人一人と顔を合わせて、その人の個人的な悩みや悲しみや苦しみに答えを与えてくださいました。でも、イエス様は弟子たちの見ている前で、天に昇られ天のお父様のところに行かれて、姿が見えなくなりました。

イエス様の約束

「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいます。わたしは決してあなたの方のことを見離すことも見捨てることもしません。だいたいようぶだよ」と、励ましの言葉を残して昇天されたイエス様のお姿は、もう弟子たちの肉眼で見えることは出来なくなりました。しかし弟子たちは、イエス様と最後に食事をした席上で、語られた大切なお話を思い巡らしていました。最後の晩餐という有名なレオナルド・ダ・ヴィンチの描いた絵を観たことがありますか。(聖画を用意してください) この絵は、その時の様子が描かれたものです。イエス様を囲んで弟子たちがお話を聞いていますね。イエス様ご自身は、これが弟子たちと

の最後の食事だとわかっておられましたので、一つ一つ大切なお話を、心を込めてなさいました。その中の一つに「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし、行けばそれをあなたがたにつかわそう」という約束がありました。

助け主の到来

イエス様はその席上で、「わたしのことを嫌って、憎んで十字架につけて殺そうとしている人々は、やがて、わたしだけでなくあなた方をも嫌って憎んで、会堂から追い出したり、殺したりするでしょう。今までは、わたしが一緒にいてみんなを守る事ができました。まもなく、わたしは父のみもとに行こうとしています。ですから、もう一緒にいてあなた方を守ることはできません」とおっしゃいました。それを聞いた弟子たちはビックリしました。「どうしよう、イエス様が一緒にいてくださらないなら!」と、心が恐れと悲しみでいっぱいになりました。そんな弟子たちにイエス様はやさしく、おっしゃいました。「安心しなさい。一人ぼっちになんかしません。わたしがいなくなったら、わたしの代わりにみんなを助けてくれる助け主が来ますよ。この方はもっともつと、みんなの側近くに、いいえ、あなたの心の中に住んで助けてくださる方なのです」。

みなさんは理由もなく誰かに悪口を言われ、仲間外れにされたことはありませんか。また、家族や友だちに自分の気持ちがあつてもうえなかつた、悲しい経験をした人もいるかもしれません。

でも、いつでも困った時に助けに来てくれるテレビのヒーローのように、イエス様が遣わしてくださる助け主もいつでも、どこにでも来て、私たちを助けてくださる方なのです。なんと力強いことでしょう。

真理の御霊のお働き

真理の御霊が降る時には困難に打ち勝たせる力だけでなく、あなたがたをあらゆる真理に導いて、世の人の心の目を開いて罪と義とさばきについて気づかせてくれます。人々はイエス様を救い主とは知りません。しかし、真理の御霊が働かれるとき、人々は「イエスは主である」と告白することができるようになります。またイエス様こそ義なる方であり、完全な裁き主としてこの世のサタンを滅ぼし、新しい天と新しい地の創造者として栄光をあらわしてくださる、まことの主であられることを知らせてくださるのです。何も恐れるものはありません。うれしいですね。

荒川康子宣教師は小児科医師です。ミャンマーの国でやがて宣教師として働く準備をしていました。二〇〇七年ミャンマーに暴動が起り、日本人カメラマン長井健司さんが射殺され、大きなニュースが流れたことを覚えているでしょうか。荒川宣教師の心はそんな事件でもひるむことなく11月にミャンマーに飛び立つて行きました。彼女が家を出た後、彼女の部屋に一通の手紙が残されていました。それは遺書でした。真理の御霊は神のみ心を知らせて、力強く私たちを押し出してくださる方なのです。何と素晴らしい事でしょう。

♪地のはてまでも♪(ふくいん子どもさんびか26)



聖書 使徒2・1～21 テーマ 聖霊降臨

序論

(加藤)

使徒行伝の主題は世界宣教である。神のご計画のもとに備えられた主イエス・キリストの十字架と復活の福音は、聖霊降臨によって誕生した教会を通して、全世界に宣べ伝えられることとなった。使徒行伝はそのような弟子たちの、御霊による力強い宣教の働きを証するものである。

一、約束の待望

先に復活され主は、その後40日間、弟子たちに現れ、彼らに、エルサレムに留まり、かねてからの約束である聖霊によるバプテスマを待つようにとお命じになった(1・4、5)。

そして天に昇られる直前にも、弟子たちに、「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」(1・8)と言われた。

またヨハネによる福音書によると、先に主イエスは十字架の苦難の前にして弟子たちに、ご自分の代わりに助け主なる御霊を送ることを約束された(ヨハネ14章参照)。

その故に弟子たちに必要なことは、主の約束に従ってキリストの証人となるべく、祈りと一致をもって聖霊をひたすら待ち望むことであつた。

二、約束の実現

主イエスのご昇天の後、10日目の五旬節(じゆんせつ)の日に、ついに約束の御霊が弟子たちの上に降った。激しい風の響きの中、舌のようなものが、炎のように分かれて弟子たちの上に留まると、彼らは聖霊に満たされ、集まって来た人々の前で語りだした。この時の弟子たちの行為には二つの特徴があつた。一つは、彼らが他国の言葉で語ったことであつた。その結果、祭りのために世界中から来ていたユダヤ人は、それぞれの国の言葉で、弟子たちの話を聞くことになった(2・5～12)。これは聖霊降臨による世界宣教(1・8)の発端として、ふさわしい出来事であつた。

もう一つは、弟子たちがしっかりと福音を語ったことであつた。彼らは他国の言葉を語ったが、そこで脈絡のないことを言ったわけではなかった。むしろ周囲の人々が聞いて、彼らの言葉が「神の大きな働きを述べる」言葉である、と、はつきりと悟ることのできることを証した。

それゆえに実現された聖霊降臨は、主が弟子たちを用いてこれからなされる世界宣教の出発点となった。弟子たちはついに、御霊による宣教の力をいただき、共に立ち上がったのである。

三、約束の証明

聖霊降臨の場面は、「あの人たちは新しい酒に酔っているのだ」と言う心無い者たちの中傷と、それに対するペテロの弁明へと展開した。ペテロは契約の民に旧約のヨエル書をもって語りかけた。

「神がこう仰せになる。」

終わりの時には、

わたしの霊をすべての人に注ごう。
そして、あなたがたのむすこ娘は預言をし…
その時には、わたしの男女の僕たちにも
わたしの霊を注ごう。

そして彼らも預言をするであろう」

このようにペテロは、ここで自分たちが体験した聖霊降臨の出来事が、終末を預言するヨエル書の「(終わりの時)」の成就に他ならないことを示した。この預言が成就した今こそ、「わたしの霊」(聖霊)を受けたすべての者たちが、「預言をする」者となるのであつた。

そして「上では、天に奇跡を見せ、下では、地にしるしを、…見せるであろう」とあるように、御霊を受けた弟子たちの宣教には、神の大きなしるしが伴うものとなった(2・43他)。

さらに大事なことは、約束の御霊が地上に降った今、「主の名を呼び求める者は、みな救われる」ことであつた。聖霊が降ったこの時こそ、イエスを主なるキリスト(2・36)と信じて告白するすべての者がもれなく、救いにあずかることができる時となったのである。

このようにペテロは、ヨエル書を通して、聖霊降臨をもって弟子たちに宣教の力を与えてくださる主の恵みの業を、会衆の前に力強く証したのであつた。

結論

主の約束は真実である。ヨエル書はそれを証明する。私たちも聖霊の恵みにあずかって、弟子たちのように宣教の幻を持って立ち上がろう。

研究資料

(足立)

ペンテコステは、しばしば教会の誕生と言及される。12人の使徒（イスカリオテ・ユダに代わりマツテヤ、参照1・26）とその他無名の兄弟姉妹たちが多数、イエスの命令どおりに一つところで聖霊の降臨を祈り待ち望んでいたと思われる。その彼らに聖霊なる神は、目に見え、耳に聞こえるしるしを伴って臨まれた。これはイエスの約束（1・5、8、ルカ24・49）の成就であった。ここから教会の宣教のみわぎが始まった。

テキスト

1 五旬節

（ペンテコステ）とは、大麦の収穫の初穂をささげる過越の祭りから50日目と言うことである。すなわち過越節後の最初の日曜日から数えて50日目に祝われるので、その名がある（参照レビ23・15〜21、申命記16・9〜12）。**みんなの者が一緒に集まって** この場所が最後の晩餐が行われた二階の広間（ルカ22・12）か、或いは弟子たちが滞在していた屋上の間（1・13）と同じところかどうかは断定できない。ルカは一連の状況を説明せず、出来事だけを伝えている。おそらく彼らは心を合わせて、祈りに専念していたのである（参照1・14）。

2 これはまさしく聖霊の降臨である。ここで風そのものが吹いたわけではない。強調点は、その出来事の客観性にある。聖霊降臨は聞き取れるものであった。聞き取れる顕現が、突然天から到来したことから記されている。当時風が神の霊を

象徴するものとして見られていたのは確実（参照エゼキエル37・9〜14、ヨハネ3・8）。ここでルカは、弟子たちの間に起こった聖霊の圧倒的な臨在を伝えようとしている。この出来事は弟子たちが今まで経験したこともない人格的な力であった。聖なる臨在と御力が、天から注がれた。

3 聖霊の降臨を伝えるもう一つの象徴は、火である。一世紀のユダヤ人の間では、聖なる臨在の象徴として火はよく知られていた（参照出エジプト3・2〜5、13・21、19・18、24・17、40・38、列王上18・38〜39、エゼキエル1・27）。ここで火は**分れて**と記されている。大切な点は、聖霊の臨在が分かれて**ひとりびとりの上にとどまった**ことである。イエスによる新しい契約のもとでは、聖霊は信者一人一人の上に個人的に注がれる。このことは決して十字架に贖われた個人と教会を分離するものではない。むしろここではペンテコステの出来事により、神と信仰者の間に聖霊による人格的な交わりが与えられたことを強調している。ここは見える顕現による記述。

4 聖霊が降臨した外面的なしるしとともに、弟子たちの上にもたらされた内的な現実が描写されている。すなわち**一同が聖霊に満たされ**たのである。「満たされた」という動詞は、重要である。ルカ伝や使徒行伝の至るところで、聖霊による力づけを記し（ルカ1・15、使徒9・17）、或いは神の言葉を語るため奮い立たせられるときに使われている（使徒4・8、31、13・9）。ペンテコステの場合もしかりである（参照2・5以下）。この動詞が関係するところでは繰り返し聖霊の満たしが

記され、或いは聖霊の満たしの継続的な過程に使われている（使徒13・52、エペソ5・18）。

使徒6・3、5、7・55、11・24、ルカ4・1の言及に関してはすべて、既に聖霊に満たされてきた人が、特別な働きや宣言のために新しく満たしを受けることを意味している。2・4で「聖霊に満たされる」と呼ばれることが、他の箇所では、バプテスマを受ける（使徒1・5、11・16）、或いは注がれる（2・17以下、10・45）、また受ける（10・47）と呼ばれている。換言すればこれらの言葉は、ルカにおいては相互交換可能であり、ルカはそのように使用している。そして専門用語としては取り扱わないで、違った霊的経験を年代順に並べるために手際よく振り分けられている。つまり聖霊に満たされるという基本的行為が、様々な言い回しによって表現されているに他ならない。

いろいろの他国のことばで語り出した

これは聖霊に満たされた弟子たちが他の言語で語ったことに言及している。2・5以下を見れば、聴衆がこれらの人々が語ることが聞いていたことがわかる（参照2・7〜8）。弟子たちが語った内容は「神の大きな働き」（2・11）であった。彼らは決して恍惚状態で演説したのではない。離散したユダヤ人がエルサレムに戻ってきて、ガリラヤ人が語る各国の言葉で神のみわぎを聞こうとは、誰も予想していなかった。

参考図書

F・F・ブルース『使徒行伝』聖書図書刊行会、Polhill, J. B., Acts (Broadman), Witherington, B., The Acts of The Apostles (Eerdmans)。

聖書

使徒行伝2・1〜21

タイトル

聖霊降臨(ペンテコステ・母の日)

暗唱聖句

終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。

目 標

使徒行伝2・17
ペンテコステに注がれた聖霊に満たされよう。

導入

(松浦み)

5月第2日曜日の今日は母の日です。丁度今から100年前の一九〇八年、アメリカで一人の婦人がお母さんの愛に感謝を表す方法としてカーネーションの花をささげる記念会を行いました。私たちも日頃のお母さんの労苦と愛に感謝して「ありがとう」と言いましょ。お母さんもそのやさしい言葉に、日頃の疲れが吹っ飛んできつと元気づけられることでしょう。

もう一つ今日は大切な日です。ペンテコステといって聖霊が降って教会が誕生した、教会の誕生日なのです。ある教会では、教会の誕生日を記念してケーキを飾り、共に食べてお祝いすることをしています。あなたの教会はいかがでしょう。

イエス様の約束を待つ

イエス様は天にお上りになる前に、「エルサレムから離れないで、約束していた聖霊を待ち望みなさい。聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となるであらう」

と言われました。弟子たちのほかイエス様のお母様のマリヤや兄弟たち、120名ばかりの人々は心を合わせ、ひたすら祈って聖霊を待ち望んでいました。

約束の成就

イエス様が十字架で死なれたのは過ぎ越しの祭りの時でした。エジプトの奴隷だったイスラエル人がエジプトから解放される時小羊をいけにえとして捧げ、かもいと両脇の柱に血を塗って神の裁きを免れました。そのことを記念してイスラエルでは過ぎ越しの祭りが大切に守られていました。丁度この時に、イエス様は犠牲の小羊のようにな

って、私たち人類が罪の奴隷から解放されるために十字架で死んでくださったのです。過ぎ越しの祭りの本当の意味を知らせるためだったのですね。その時から50日目に刈入れの祭りが守られました。これは、小麦の収穫感謝祭でしたが、ユダヤ教では十戒が与えられた日として律法を感謝する日となっていました。このような記念すべき五旬節(ギリシャ語のペンテコステ、第50の意味)の日に約束の聖霊が天から降ってこられ、新しい律法による新しい聖霊の時代が幕開けしたのです。その時の様子は誰もが見たことも経験したこともないような不思議な出来事でした。突然、祈っている人々の所に、ゴーツという激しい風が吹いてくるような音がして家全体を覆い包み、響きわたりました。「なっ、何だー」と驚いている弟子たち一人一人の上に、舌のようなものが炎のように分かれてとどまりました。するとどうでしょう。そこにいた人々は一同一人残らず、聖霊に満たされ、御霊

が語らせるままに、今まで話したこともないような外国の言葉で語りだしたのです。彼らは意味不明のわけのわからない言葉をしゃべったのではなく、神様の大きな働きをそれぞれの他国の言葉でつきりと証をしたのです。この時エルサレムには五旬節を祝う人々が世界各地から集い、十七、八の国語で弟子たちが福音を語ったものですから、人々は「こりゃあ、いったいどういうことなんだ」と目をまんまるくにして、ただただ驚くばかりでした。

ペテロの説教

中にはこの様子を見て、「あの人たちは新しいぶどう酒を飲んで酔っ払っているのだ」とあざ笑う人たちもいました。そこでペテロが立ち上がって「みなさん今は朝の九時ですから、私たちは酒に酔っているわけではありません。これは昔の預言者ヨエルが『終りの時にはわたしの霊をすべての人に注ごう』と、預言していたことが今日、実現したのです。老人も若者も男も女も関係ありません。すべての人に聖霊が注がれ、神をほめたたえ、幻を見、夢を見る者とされるのです。そしてもっとも素晴らしいことは、主の名を呼び求める者は、一人ももれなく救われるのです」と、力強く語りました。確信に満ち輝いた顔で語るペテロさんには、もう昔の臆病者の面影はありません。聖霊が降るとき、一瞬に人は変えられ、復活の主の証人になることが出来るのですね。私たちも聖霊に満たされるよう祈りましょう。

♪すべてはイエスさまのもの♪
(ふくいん子どもさんびか68)



聖書 使徒行伝2・36-47

テーマ 聖霊の賜物

序論

(加藤)

聖霊降臨によって、主の宣教を担う教会がこの世界に誕生した。ペテロの説教を聞いて回心した人々は勧めに従い、イエス・キリストの名によるバプテスマを受け、教会の交わりの中に生きる者となったのである。

一、救いを求める声

ユダヤ人たちへのペテロのメッセージも、いよいよクライマックスを迎えた。その結論は、ユダヤ人が十字架に処刑したイエスこそが、神が立てられた「主またキリスト」であると言うことであつた。

このペテロによる確信に満ちたキリストの証に、人々は「強く心を刺され」、自分たちが主イエスを受け入れずに十字架につけてしまったという罪の自覚と、救いに対する強烈な渇きが湧き起こつた。彼らにもはや救いを求めることへの、何の躊躇もなかった。「兄弟たちよ、わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」。

二、悔い改めとバプテスマへの招き

救いを求める人々の声を聞き届けたペテロは、罪のゆるしを得るためになすべきことを告げた。「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい」。

ペテロが人々に示した第一のことは「悔い改め」であつた。本来この悔い改め（メタノエオー）は、人の心や目的を変えるということである。それでは、ペテロが人々に要求した悔い改めとは、何であつたのか。それは、主イエスをキリストとして受け入れなかつた自分たちの不信仰、反逆の罪を彼らが認め、その姿勢を改めること。そしてイエスを、主なるキリストと信じることであつた。

第二のことは、「イエス・キリストの名によって、バプテスマを受け」ることであつた。

キリストの十字架と復活のみ業が完了し、約束の聖霊が降つた今、悔い改めて主イエスを信じるすべての人々は、イエス・キリストの名によるバプテスマを受け、新しく生まれ変わり、教会の交わりの内に生きる者となるのである。

ここでバプテスマを、単に主イエスを信じた「しるし」としての行為と理解してはならない。初代教会がペテロの説教に応答して、バプテスマをもつて誕生したように、教会の存在とバプテスマは本質的に切り離すことができないものである。私たちがバプテスマを受けるということは、私たちが新生して、これまでとは全く異なる新しい存在となる、即ちキリストの体の一部に組み入れられていることを意味するのである。

三、聖霊の賜物

ペテロによるバプテスマの勧めには、恵みの約束が伴つた。それは「聖霊の賜物」の附与である。「そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであらう」。

先にペテロを初めとした弟子たちは、聖霊の注ぎを受けたが、彼らに与えられた同じ御霊が、今やイエス・キリストの名によってバプテスマを受けるすべての者に、賜物として与えられるのである。

このペテロの勧めを受け入れた者たちは、バプテスマを受け、生まれ変わつて聖霊の賜物にあずかり、そこから新しい共同体たる教会が誕生したが、そこにいくつかの特徴が見られた。それは、

第一に、主にある交わりである。

「一同はひたすら、使徒たちの教を守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈をしていた」。聖霊は彼らに主にある交わりを与えてくださった。それは地域、人種、党派を超えてキリストの下に等しく一致した交わりであつた。聖霊はこの交わりを地上に実現した。

第二に、宣教の力である。

バプテスマを受けた人々は、聖霊によって祈りと賛美をもつて歩んだが、彼らの生き方は周囲のすべての人々に「好意を持たれ」た。そして主は彼らを用いて救われる者たちを起こし、彼らを日々仲間に加えられたのである。

このように、聖霊はバプテスマを受けた者たちの心の内に働いて、一致と交わりを与え、宣教の力を満たしたのである。

結論

ペンテコステの聖霊降臨によって、悔い改めてイエス・キリストの名によるバプテスマを受けるものに聖霊の賜物が確かに与えられた。私たちもこの恵みにあずかる者とならう。

研究資料

(足立)

使徒2・22〜36はペテロの説教の中心部分である。導入として伝道における神の行為を要約し、キリストの死と復活が始まっている(22〜24)。そして詩篇16・8〜11を聖書の根拠として、キリストが事実希望の救い主であり、その復活を証明、提示している(25〜31)。更に詩篇110・1を根拠に、復活のキリストが今や父なる神の右の座に就いた救い主であり主であると描写している(32〜36)。これはキリストの死と復活が結びついた福音提示である「あなたがたが殺したナザレのイエスを、神は復活させた」という基本的な信仰告白が、使徒行伝全体を通して見受けられる(3・15、4・10、5・30、10・39〜40、13・28〜30)。

テキスト

37〜39 ペテロの説教は聴衆の核心を衝いた。彼らは救い主を拒絶し、十字架につけた罪を犯した。**強く心を刺され** 強烈な感情に言及している。聴衆の応答に対するペテロの対応は、ほとんど予定されていたかのようにであった。彼は回心経験における四つの本質を彼らに提示した。すなわち悔い改め、イエス・キリストの御名による洗礼、罪の赦し、聖霊を受けること。聖霊と洗礼の結びつきは、使徒行伝全体に連動して描写されている(参照8・12〜17、29〜38、10・44〜48、19・5〜6)。聖霊なる神は一つのパターンに縛られてはいない。しかしながら洗礼と聖霊を受けることの間には、人がキリスト信仰者になる経験に明らかな規範が

あると言えるだろう。

38節にある洗礼と罪の赦しの結びつきは、あくまでキリストの御名による罪の赦しが基盤となつて、洗礼を受ける根拠となる。ルカは重要なこととして罪の赦しの結びつきを、洗礼にはなく悔い改めにおいている(参照、ルカ24・47、使徒3・19、5・31)。事実使徒行伝において洗礼が罪の赦しをもたらすかのように提示されている箇所はどこにもない。悔い改めとの結びつきでない場合も、赦しは信仰と結びついている(参照、10・43、13・38〜39、26・18)。38節にある支配的な概念は、悔い改めであり、他の要素はこれに続くものと思われる。悔い改めが、洗礼、罪の赦し、そして聖霊の賜物に至らしめる。ペテロがユダヤ人の聴衆に求めた応答は真実な悔い改めを含む完全な方向転換であり、救い主を拒んだことから立ち帰り、彼の御名を呼び求めることである。またイエスの共同体への洗礼を受け入れ、聖霊の賜物を分かち合うことである。ペテロは(ヨエル2・32) 21節の約束に訴え、自分の主張を結論づけた。ここでは約束の普遍的見地が強調されている。救いはペンテコステに現されたユダヤ人グループのためだけではなく、将来の各世代のためのものでもある。またユダヤ人だけではなく、異邦人のためのものでもある(参照イザヤ57・19、エペソ2・14、17)。

40〜41 この曲がった時代 とは、頑固で反逆的かつ神に不従順な世代のための旧約用語である(詩篇78・8、参照申命記32・5、ピリピ2・15)。聴衆のユダヤ人は救い主を待望しつつも彼を拒否した世代であった。

42 ひたすら…していた ここでキリスト信仰者

一同は新しいいのちの中で四つの実践に自分たちをささげていたと、言われている。第一は **使徒たちの教え** であった。イエスによって教育されてきた使徒たちは、新しいキリスト者を教えるのに時間をかけた。彼らにイエスの教えを守らせることには、以下のような主題が含まれていたであろう。すなわちキリストの復活、旧約聖書概観、キリストの証人、イエスの地上生涯、みわざと教え、新しい共同体生活の指針等。第二は **信徒の交わり**。交わりと訳される言葉(コイノーニア)は、ルカ福音書・使徒行伝全体においてここだけの使用である。この言葉それ自体は、参加することであり、或いは誰かと共通のことを分かち合うことを意味する。この場合は、使徒たちの教えを分かち合ったと考えられる。交わりとは、あまり良い翻訳とは言えない。というのは交わりとはコイノーニア(共に分かち合うこと)の結果である。つまり交わりはそれ自体コイノーニアではない。コイノーニアは一つの活動であつて、ある種の交わりを結果としてもたらすことになる。そして、み言葉の学びや祈りという霊的な活動だけではなく、肉体の食物や他の物資を共に分かち合うことも必然的に含む(参照2・45、4・32〜37、1コリント10・16、Ⅱコリント9・13)。第三は **共にパンをさき** である。これは後代の典礼としての聖餐というより、日常の食事の中で主を記念して聖餐を行ったのであろう。第四は **祈り**。新しい共同体にとって神との友情が生きること。

参考図書 Polhill, J.B.: Acts (Broadman)

聖書

使徒2・36〜47

タイトル

聖霊の賜物

暗唱聖句

イエス・キリストの名によって、
バプテスマを受けなさい。

目標

バプテスマを受けて罪のゆるし
と力を受けよう。

導入

(松浦み)

アメリカ大統領選挙の様子が、日本のテレビでも毎日のようにニュースの時間に放映されています。今回の候補者の一人オバマ氏は黒人として初めての候補者です。今から44年前の一九六四年度ノーベル平和賞を黒人牧師マーティン・ルーサー・キングが受賞しました。当時アメリカ社会では黒人は人間として認められていなかったのです。しかし、キング牧師の非暴力主義、無抵抗の運動によって黒人の人権が認められるようになりました。彼は信仰により聖霊に満たされて「私には夢がある」と人々に訴え、やがて黒人、白人の区別なく、すべての人類が神の力の前にひざまずく日がくるであろうと、語っています。オバマ氏の様子を見ながらキング牧師の夢が実現へと大きく前進しているのを感じますね。

ペテロの説教

先週に続いてペテロの説教に耳を傾けましょう。イエス様が十字架につけられる時、「おまえはあのキリストの弟子だろう!」と人々に名指しされた

とき「いいや、そんな人は知らない」と3度もイエス様を否定したペテロの姿はもうそこにはありません。人々の前に堂々と立ち上がり、輝いた顔で「私はイエス様の復活の証人です。あなたがたが十字架につけたイエス様こそが、神が立てられた救い主キリストであられたのです」と言いましました。人々はこれを聞いて強く心を刺され、「ああ、私たちは主イエスを受けて入れずに罪なきお方を十字架に付けてしまった。どうしたらよいだろうか」と心を責められました。するとペテロは「悔い改めなさい。一人一人が罪の赦しを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるでしょう」と語りました。人々はペテロの勧めの言葉を受け入れ、続々とバプテスマを受けました。

世界で初めての教会の誕生

なんと驚いたことに、聖霊が降って来られたペンテコステの日、1日で三千人ほどの人々が罪を悔い改めて、イエス・キリストの名によるバプテスマを受けたのです。そして、信者たちは一緒にいて、使徒たちの教えを守り、信徒の交わりをして、祈りをしていました。これが世界で初めての教会です。教会は建物ではありませんね。神ご自身が人々を選び出し、召し集めた群れそのものです。この初めての教会の様子を見ると、いろいろの国の言葉をしゃべる者たちが、人種や言葉の別をこえて集まり、使徒たちの教えを守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈りをしていました。

それだけでなく、持ち物を共有して、必要に応じて分け与えつつ、日々心を一つにして、福音の宣教に励み、喜びと感謝に満ち溢れて神を賛美しつつ歩んでいました。教会は常に聖霊に導かれ、新しい神の民としての交わりと福音宣教のわざにあたって、今日まで受け継がれているのです。

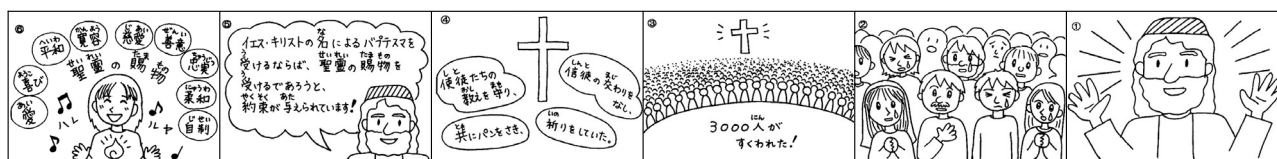
聖霊の賜物

ペテロは、「イエス・キリストの名によるバプテスマを受けるならば、聖霊の賜物を受けるであろうと、約束が与えられています」と語りました。そのとおりに、イエス・キリストを信じバプテスマを受けたすべての人々に、ペンテコステに注がれた同じ聖霊が、賜物として与えられました。聖霊は人々の中に働いて豊かな実りを与えてくださったのです。聖霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制です。ですから人々は持ち物を共有し、一致と交わりをもって、互いに受け入れ合い、神を賛美しつつ過ごしてきましたのです。その生き方は周りの人々に良い証となり、次々と救われる人々が加えられました。なんて素晴らしい教会の姿でしょうか。

私たちもイエス・キリストの名によるバプテスマを受けて、聖霊の賜物をいただきましょう。あなたを見る人たちが「私も教会に連れてって」と言ってくださるなら、どんなに主が喜んでくださることでしょう。教会学校に休まず出席し、互いに励まし合いながら1週間を過ごしましょう。

♪歌い続けよう主の愛を♪

(日本ホーリネス教団子どもさんびか77)



聖書 使徒行伝6・1-7 テーマ 聖霊の器

序論

(加藤)

聖霊によって誕生した教会の宣教が進み、弟子たちの数が増えるに従って生じたのは、食物の配給の問題だった。教会は、この問題に対しての適切な対応を迫られることになった。

一、やもめの配給の問題

当時のエルサレムの教会の人々は、持ち物を共有して一緒に暮らし、食事を共にしていた(2・44-46)。また、彼らの中で乏しい者が出ないようにとの配慮も払われていた(4・34)。

しかし、弟子たちの数が急速に増すにつれ(5・28)、教会内で、ヘブル語を使うユダヤ人とギリシヤ語を使うユダヤ人との間に、やもめの日々の食物の配給をめぐる、もめことが生じた(6・1)。ギリシヤ語を使うユダヤ人が苦情を申し立てたこの問題は、教会を指導する使徒たちが、早急に解決しなければならぬ課題となった。

二、使徒たちの決断

そこで十二使徒たちは、弟子全体を召集して問題の解決のための提案をした。

使徒たちはまず、自分たちのなすべき務めの中で、何を最優先にすべきかを明らかにした。

「わたしたちが神の言をさしおいて、食卓のことに携わるのはおもしろくない」。

ここで弟子たちの言う、「おもしろくない」とは、

好き嫌いといった意味ではなく、事の良し悪しをきちんと判断した上で、「同意できない」という意味である。彼らは、主の群れが言葉によって養われることの必要を良く分かっていた。

次に使徒たちは、配給の世話を担当するにふさわしい者たちを選出することを提案した。

「そこで、兄弟たちよ、あなたがたの中から、御霊と知恵に満ちた、評判のよい人たち七人を捜し出してほしい。その人たちにこの仕事をまかせ、わたしたちは、もっぱら祈と御言のご用に当ることにしよう」。

使徒たちはこの7人を選び出す際に、奉仕者としての資質に言及すること忘れなかった。7人はなにより「御霊と知恵」に満ちた器でなければならなかった。教会内の人々の世話をする務めに与かる者として必要とされている資質は、人間的な能力ではなく、何よりも御霊に満たされていること、そしてその結果として与えられる神の知恵に満たされていることであった。使徒たちはそのような7人を捜し出し、彼らに配給を含めた教会の実際的な奉仕を任せ、大切な祈りとみ言葉のご用に専念することにしたのであった。

このように、教会の働きの中心は、み言葉と祈りがなされることであつたが、そのためには、み言葉と祈りの奉仕に励む使徒たちを助け、配慮をもって教会内の諸事を取り行う霊の器が必要とされたのである。

三、7人の任命

このような使徒たちの提案は、会衆一同の賛同

を得ることとなった。会衆はステパノをはじめとした7人の「信仰と聖霊とに満ちた」人々を選出し、使徒たちの前に立たせた。使徒たちは祈って、手を彼らの上に置いた。

このようにして、7人の器が配給の務めに与かる働き人に任命されたが、その結果、教会は大いに祝福され、宣教のわざが進められた。

「こうして神の言は、ますますひろまり、エルサレムにおける弟子の数が、非常にふえていき、祭司たちも多数、信仰を受けられるようになった」。

教会は、キリストの命にあふれる生ける共同体である。その故に、教会の上に困難な問題が生じたとしても恐れる必要はない。やもめの食事の問題を解決することのできた初代教会のように、教会の本質をしっかりと捉え、祈って対処するならば、必ず解決が与えられ、困難な問題も祝福に変えられるのである。

そして私たちはまた、教会の様々な働きにふさわしい器が与えられるように、祈らなければならない。主は教会の全体の益になるように、聖霊の器を起こし、豊かに用いてくださるのである。私たちが一致をもって、各自、恵みによって与えられた御霊の賜物を生かして、互いに仕えあうならば、主は私たちの教会を豊かに祝福し、宣教のわざに用いてくださるのである。

結論

教会が祝福されるように、神様は聖霊の器を立ててください。その方々の働きのために祈り、私たちも賜物を生かして主にお仕えしよう。

研究資料

(木村)

二度の迫害(4・13、5・17、42)と、アナニヤとサツピラ夫妻による偽りの問題を乗り越えてきたエルサレム教会であるが(5・13、11)、弟子の数が増えるにつれて新たな問題が生じてきた。日々の配給に関する問題である。

テキスト

1 **ギリシヤ語を使うユダヤ人**(ヘレーニステース) パレスチナ以外で生まれ育った、いわゆる離散(ディアスポラ)のユダヤ人で、ヘレーニストと呼ばれる。通常ギリシヤ語を使った。**ヘブル語を使うユダヤ人**(ヘブライオス) 大半がパレスチナで生まれ育ったユダヤ人で、ヘブライストと呼ばれる。**ヘブル語** とあるが、正確にはアラム語を使った。**日々の配給**(ディアコニア) 裕福な教会員たちが「資産や持ち物を売って」献げた献金によって、貧しい教会員たちのために日々の配給が行われていた(2・44、4・34、35)。特に身寄りのないやもめ たちにとつては、日々の配給は必要不可欠であった(1テモテ5・3、16)。**苦情**(コングスモス) ブルーという音を表す擬音語。両者は同じユダヤ人であっても、言葉も生活習慣も異なることもあって、両者の間には以前から緊張状態があった。それが遂に表面化する契機となったのが、ヘレーニストのやもめらが、**日々の配給で、おろそかにされがちだ** という一見些細な問題であった。ヘブライストによって日々の配給が行われていたからであろう。

2、4 **十二使徒は弟子全体を呼び集めて** 問題

を放置したり、十二使徒だけで解決したりせず、教会全体で積極的に教会の組織・制度を改善する機会とした。霊的な問題にしても、物質的な問題にしても、一つのことの良くも悪くも他の方面に波及することを知っていたからである。**食卓のことに携わる**(ディアコネオー)のはおもしろくない十二使徒の第一の使命は、**祈と御言のご用**(ディアコニア)に当ること。すなわち礼拝とみ言葉の宣教であった。決して配給を蔑視したわけではない。日々の配給の最終的責任は確かに十二使徒にあったが、これは彼らの第一の使命ではなかったということである。そこで、**この仕事をまかせ**る7人を選出するのであるが、その条件は、**御霊と知恵とに満ちた、評判のよい人たち** ということであった。奉仕に携わる者は、まず**御霊**に満たされなくては、**神の知恵**によって問題解決にあたることのできる人でなければならない。そして、信仰的にも人格的にも、教会の内外で証の立っている**評判のよい**人でなければならない(10・22、16・2、22・12)。表面的な評判だけを得ようとしてさばかれたのが、アナニヤとサツピラ夫妻であった。

5、6 **選出**して 7人はいずれもギリシヤ名を持つ人で、ヘレーニストと思われる。ヘレーニストから出た苦情を処理するためには実に賢明な人選であった。7人のうち筆頭に記されるのが**ステパノ**(冠の意)であり、特別に**信仰と聖霊とに満ちた人**と紹介されている。初代教会最初の殉教者となった(6・8、7・60)。二番目に記される**ピリポ**も、サマリヤやガザで目覚ましい働きをした(8・5、40、

21・8)。他の5人についてはあまり知られていない。7人の奉仕分野は、日々の配給だけにとどまらなかった。**手を彼らの上においた** 旧約時代、祝福を与えるために按手した(創世記48・13、16)。牛や羊を供え物として献げる際、牛や羊の頭に手を置いたが、それによって供え物と手を置いた人とは一体となることを意味した(レビ1・4、3・2、4・4、16・21他)。さらに後継者を任命するために按手した(民数記27・22、23)。それゆえ、十二使徒による按手は、十二使徒と7人を結びつけ、7人を祝福して奉仕に任命するためのものであった。

7 **こうして神の言は** 7人が実際の奉仕をし、十二使徒が「もっぱら祈と御言のご用に当ること」によって教会本来の姿が確立された結果、**こうして神の言は、ますますひろまり…ふえていき…受けいれるようになった** 同様の宣教の伸展報告が、9・31、12・24、16・5、19・20、28・31にも出てくる。3つの動詞はいずれも未完了時制で、継続的な成長を描写している。**祭司たちも多数、信仰を受けいれるようになった** 上級の祭司のほとんどはサドカイ派であったが、年に数週間だけエルサレムに来て奉仕する祭司の多くはそうではなかった。信仰に入っただけで、そのような祭司たちであったと思われる。遂に神殿組織内にも福音が進出し始めたのである。

参考図書 斎藤篤美「使徒の働き」『新聖書注解 新約2』(いのちのことば社)、F・F・ブルース『使徒の働き』(聖書図書刊行会)、C・S・Keener『The IVP Bible Background Commentary: New Testaments』(IVP)他

聖書

使徒6・1〜7

タイトル

聖霊の器

わたしたちは、もつぱら祈と御

暗唱聖句

言のご用に当ることにしよう。

目 標

聖霊に満たされて用いられる器になるう。

使徒6・4

導入

(松浦み)

あなたはクラスや部活などで何かの役を引き受けていますか。また、お家でも何かの仕事の役割分担をしてお手伝いしていますか。一人で様々なことをしても限りがありますね。でも、みんながそれぞれ役割分担をして同時に仕事をするなら、その働きは大きく前進します。クラスや部活の長という役割の人が偉いのではなく、支える一人一人が大切な存在です。どんな小さな働きでも心をこめて忠実にしましょう。それはやがて大きな働きとなるのです。

教会のもめごと

先週は世界で初めての教会がペンテコステの日に誕生したことを学びましたね。このエルサレム教会に困ったことが起つてきました。三千人、四千人、五千人と日に日に信者が加えられて増えるにしたがつて、教会内でギリシャ語を使うユダヤ人とヘブル語を使うユダヤ人との間に、やもめの日々の食物の配給をめづつて、苦情が出、もめごとが起つてきたのです。皆さん「やもめ」という言葉の意味がわかりますか。「やもめ」というのは

夫を失った女の人のことを指します。当時のエルサレム教会の人々は、持ち物を共有して一緒に暮らし、食事を共にしていました。そして、彼らの間に貧しい者が出ないようにと、財産のある者たちはそれを売り、売った代金は使徒たちが管理して必要に応じて、誰にでも分け与えられるという心配りがされていました。しかし、人数が多くなればなるほど様々な問題が起つてきて、特にやもめたちの日々の食物の配給についてもめごとが生じました。

使徒たちの働きの明確化

毎日、毎日、使徒たちのところにギリシャ語を使うユダヤ人から、またヘブル語を使うユダヤ人から苦情が寄せられてきます。使徒たちはそのことをほつておけないので、いろいろと知恵をしばつて苦情の仲裁にあたつてきました。しかし、苦情の処理に時間をとられて、祈つたり、み言葉を伝えることがおろそかになってきました。「こんなことではいけない、自分たちのなすべき務めの最優先すべきことはなんだろうか」と祈り、聖霊の導きを仰いでいるうちに、一つの結論にいたりました。それは、食料の配給の世話をするにふさわしい人たちを選んで、この仕事をまかせ、自分たちはもつぱら祈とみ言葉のご用に当ると言う、使徒の働きをはつきりと区別することでした。

7人の選出と教会の働き

十二使徒たちは、弟子全体を呼び集めて言いました。「みなさん、私たちは祈りとみ言葉のご用に専念します。配給の世話をする7人を選んでその

人たちに仕事をまかせたいと思いますが、どうでしょう？」この提案は、会衆一同が賛成して7人が選ばれ、使徒たちにかわつて仕事を担当するようになりました。選ばれた7人は、御霊と知恵に満ちた、評判のよい人たちでした。特に信仰と聖霊に満ちたステパノは、後にすばらしい働きをして、教会最初の殉教者になりました。その他、ピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、ニコラオが選出されました。使徒たちは彼らの上に手をおいて祈りました。その結果はどうなったのでしょうか。教会はますます祝され、神の言葉は広まり、エルサレムにおける弟子の数が非常に増えました。驚くべきことに祭司たちの中からも、心を開いてイエス様を信じる者が多数起こされました。

教会はイエス様を頭とするキリストの体です。人間の信念や考えによつて結び合わされた集まりでなく、聖霊によつて一致が与えられた共同体であることが、聖書を読むとよくわかります。あなたの町の教会も、私の町の教会もイエス様が中心で、イエス様の十字架と復活の福音が満たされるように立てられているのです。教会の様々な働きにふさわしい器が備えられて、教会がますます祝され、主を信じる人が日々加えられるように私たちも聖霊の器になるよう祈りましょう。「どうぞ、私を聖霊に満たし、あなたの御用のために役立つものとしてください！」と。

♪もちいたまえわが主よ♪
(日本ホーリーネス教団子どもさんびか113)



聖書 使徒行伝8・26～40 テーマ ピリポ

序論

(加藤)

使徒行伝において私たちが知るべきことは、宣教のイニシアチブ（主導）を取られるのは人ではなく御霊であるということである。御霊は聖霊の器を用いて、主イエスのお約束のとおり（1・8）世界宣教を展開されるのである。今回述べるピリポも、聖霊に導かれて用いられた器であった。

一、ガザへ導かれるピリポ

先にステパノが殉教し、エルサレム教会の多くの人々は散らされることとなったが（6・8～8・3）、御霊はその機会を捉えて、ピリポをサマリヤに送り、そこでぞくぞくとバプテスマを受ける者が起こされた（8・4～25）。

これにより主のお約束の言葉（エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土）（1・8）が現実となったが、御霊はピリポをサマリヤに留めようとはなされなかった。

御霊がピリポに与えた次の導きはガザに行き、一人の異邦人と会うことであった。（立つて南方に行き、エルサレムからガザへ下る道に出なさい）。ガザへ下る道は当時のエチオピア王国にも至る街道であったが、ちょうどエチオピアの女王カンダケに仕える財務官である宦官が、エルサレムでの礼拝を終え、帰途についているところだった（8・26～28）。

二、み言葉を解き明かすピリポ

馬車に乗って旅をする宦官はイザヤ53章を読んでいた。すでにエチオピアにはユダヤ人の共同体が存在していたことが、聖書を通して伺われるが（イザヤ11・11、ゼバニヤ3・10）、このエチオピアの宦官も自国で何らかの形で主なる神を知り、主を求める者となったのであろう。そのような中、御霊はピリポに「進みよって、あの馬車に並んで行きなさい」と命じた。

御霊に導かれてピリポが馬車に駆け寄ると、イザヤ書を読む声が聞こえたので、ピリポは宦官に、「あなたは、読んでいることが、おわかりですか」と声をかけ、分からないと答える宦官に聖書の手ほどきを申し出た。

この時の宦官の疑問は、イザヤ書に記されている「苦難を受ける者」がいったい誰なのかということであった。それゆえ宦官は、手ほどきを申し出るピリポに、「ここで預言者はだれのことを言っているのですか。自分のことですか、それとも、だれかほかの人のことですか」と問うたが、このことはピリポにとって、み言葉からイエス・キリストを宣べ伝える絶好の機会となった。

ピリポは口を開いて、この聖句から説き起こして、苦難を受け、よみがえられた主イエス・キリストの福音を、余す所なく宦官に伝えた（8・35）。これらの一連のことは見ると、御霊というお方が、いかにご自身の深いご計画をもってピリポを用い、大切な一人の魂を捕らえてくださったかを知ることができる。宣教の働きとは、御霊ご自身

が備え働いてくださる中でこそ、豊かな実を結ぶものである。

三、バプテスマを受けるピリポ

ピリポの教えに耳を傾けた宦官は、悔い改めてバプテスマに預かる決心が与えられた。故に道を進んでいく中で水のある場所を見出すと、自らピリポに問うた。「ここに水があります。わたしがバプテスマを受けるのに、なんのさしつかえがありますか」。

これに対する37節のピリポの真摯な返答は、本文上考慮すべきことはあるが、十分に納得のいくものである。宦官は車を止めさせ、二人して水の中に入り、ピリポは宦官にバプテスマを授けた（8・38）。

このようにしてバプテスマを受けた宦官は、福音を携えて、当地地の果てとも思われていたエチオピアに、喜びつつ帰っていった。ピリポによって導かれた宦官の回心は、世界宣教の端緒となる出来事となった。

ピリポ自身もガザでの役目を終えると、御霊にさらわれて宦官の前から姿を消し、アゾトに導かれ、町々を巡り歩いて、カイザリヤに着いた。ピリポの宣教は終始、主のご計画の内に、御霊の主導のもとに用いられる働きであった。

結論

御霊はピリポのように、私たちを導いて宣教のわざに用いてくださる。主に従おう。

研究資料

(足立)

ピリポがエチオピア人（異邦人）に伝道する場面である。ここでピリポは聖書そのものを説き明かして、福音を伝えている。

テキスト

26 ピリポはエルサレム教会初代執事のメンバーの一人（6・5）。今彼は伝道者として奉仕している（8・5）。その彼に主の使いが神の使信を伝える（参照1・11、10・3〜6、12・7、23）。ここでルカは、神が主導権をもつてピリポの旅を導いていることを伝えているのだろう。サマリヤ伝道で用いられていた彼（8・5〜8）が別の働きに遣わされる。

27〜28 ピリポは主の語りかけに即刻従う。エチオピア人の女王カンダケの高官で…^{かんがく}宦官。この人は神を敬う異邦人。エルサレムに礼拝に来て、帰りの途に就いていた。旧約律法からすれば、ユダヤ教の礼拝者としては不適切な立場にある（申命記23・1）。しかしイザヤ^{あや}56・3〜8に希望を見出していたのかも知れない。或いは詩篇68・31の成就として見なされるのか。但しこの人にも回心が求められる。このエチオピア人は馬車に乗りつつ、イザヤ書の巻物を読んでいた。

29 聖霊がピリポに使信を伝えた（参照、10・19、13・2、16・6、7）。

30 古代において人々は黙読ではなく、音読して読むのが一般的だったようである。あなたは…**わかりですか** ピリポは彼がイザヤ書を読んでいることに接点を持つことができた。

31 エチオピア人は素直に導き手が必要であると認め、即座にピリポを馬車に引き入れ、助けを求めた。聖書が説き明かされるために、伝達者が必要。主も弟子たちに説き明かされた（ルカ24・25〜27、44〜47）。

32〜33 宦官が読んでいたのはイザヤ53・7以下で、苦難のしもべが預言されている箇所。ピリポにとつてはエチオピア人に福音を伝えるのに絶好の機会。この預言の成就是ナザレ人イエスの十字架刑によるもの。新約においてイザヤ53章は、マタイ8・17、ルカ22・37、ヨハネ12・38、Iペテロ2・22〜24に引用されている。

34 不思議なことにこの宦官は、これら数節が何を意味するかとは尋ねていない。彼は預言者が語っていることが、自らの経験か、それとも誰かの^{だれ}ことかと問うている。このことは彼が旧約聖書を深くとらえていたゆえにできる質問である。

35 キリスト者が旧約聖書と呼ぶ書物だけが聖書であった当時、このイザヤ書53章ほど救い主イエスの贖いのメッセージを伝えやすい箇所は他にないだろう。ピリポはすかさず質問された聖句から説き起こして、イエスこそがイザヤの預言成就であり、福音そのものであると伝達した。キリストの福音を伝えることは、伝える側の経験や権威に拠るのではなく、聖書に啓示されているイエス・キリストご自身を指し示すことが大切。またここでの主導権は聖霊（29）がもっており、聖書の究極的な著者である聖霊は、み言葉を通して豊かに働かれる。

36 イザヤ書からの贖罪のメッセ^{しよぐい}ージは宦官の魂

を決定的にとらえ、神に対する悔い改めと、主イエスへの信仰を持つ思いへと至らせたのだろう。このエチオピア人は迷わず、信仰を公にするため受洗を申し出ている。37節は、有力な写本にはない。後に加筆されたのだろう。神学的には正しい。

38 宦官が十分洗礼に備えられていると見て、ピリポは申し出に同意したと思われる。

39 ふたりが水から上がると、主の霊がピリポをさらって行った ストーリーの終わりとしては突然性だけが印象に残るが、神がピリポをガザへ行く道に遣わされた目的は達せられた。そしてピリポは別の働きのために、聖霊によって新たに派遣されたと考えられる。ここでも神の主権と臨在が強調されている。「主の霊」（参照、使徒5・9、ルカ4・18）。旧約聖書にもピリポと同様な出来事は記されている（参照、列王上18・12、列王下2・16、エゼキエル3・14、8・3）。いずれにせよ宦官は喜びながら帰途に就いた。彼もまた聖霊と共に歩みだしたと言えよう。

40 しばらくしてピリポは、アゾトに到着した。ここはガザの北方約30kmにある大きな町であった。彼はこの町においても福音が届けられるために労した。そこから彼は海岸沿いを北に向かつて進み、通り過ぎるすべての町々で福音を宣べ伝え、最終的にカイザリヤに着いた。そしてそこに定住したようである。再びピリポは21・8で登場するが、その時伝道者パウロ一行の訪問を受けている。彼の4人の娘は女預言者として奉仕していた。

参考図書 F・F・ブルース『使徒行伝』（聖書図書刊行会）、Marshall, I. H., Acts (IVP).

聖書 タイトル 暗唱聖句

使徒8・26〜40
ピリポ
ふたりが水から上がると、主の
霊がピリポをさらって行った。

使徒8・39。

目 標 今も生きて働かれる聖霊に聞き
従おう。

導入

(木村純)

先月は聖霊なる神様のことを学びましたね。今月からは、聖霊に満たされて神様に用いられた人たちのことを学びます。まず初めはピリポです。先週お話を聞いたように、最初の教会が誕生したとき、教会の大切なお仕事をするために選ばれた七人のうちの一人がピリポでした。ピリポは聖霊と知恵に満ち、皆から尊敬される人でした。

御霊の導きに従ったピリポ

エルサレムの教会に対して激しい迫害が起こったため、ピリポはサマリヤの町へ行き、イエス様のことを伝えました。多くの人たちがイエス様を信じ、サマリヤの町には大きな喜びが起こりました。ところが突然、神様の使いがピリポに「エルサレムからガザの町へ下る道に出なさい」と告げたのです。その地方は、人が誰も住んでいない荒れ果てた所でした。「そんな所になぜ？」と思いますが、ピリポは神様の導きに従って出かけたのです。するとちょうどその時、遠くエチオピアの国から真の神様を礼拝するためにエルサレムに来て、帰国する途中であつた一人の宦官に出会いました。

その人はエチオピア女王の財産全部を管理する高い位にある人でした。御霊がピリポに「進み寄って、あの馬車に並んで行きなさい」と語りました。ピリポはすぐに神の導きに従って、その馬車のところに走って行きました。

イエス・キリストを伝えたピリポ

その宦官は預言者イザヤの書を読んでいました。ピリポが「あなたは、読んでいることがおわかりですか」と尋ねると、宦官は「誰かが手引きをしてくれなければ、どうしてわかりましょう」と答え、馬車に乗って一緒に座るようピリポに頼みました。宦官が読んでいたイザヤ書の53章は、救い主の苦しみを預言している個所でした。宦官は「この預言は誰のことを言っているのか、どうか教えてください」とピリポに尋ねました。ピリポはこの聖句をもとにして、十字架につけられて死に、三日目に甦られたイエス・キリストこそ、預言された真の救い主であること、誰でも自分の罪を悔い改めて、イエス・キリストを信じてバプテスマを受けるなら、すべての罪は赦されることを語りました。ピリポは、聖書を通してイエス様のことを宣べ伝えたのです。なぜなら聖書は「キリスト・イエスに対する信仰によって救に至る知恵を、あなたに与えうる書物である」からです(Ⅱテモテ3:15)。

エチオピアの宦官の救い

ピリポの語ることを聞いていた宦官は、水のあるところに来たときに、「ここに水があります。私がバプテスマを受けるのに、なんのさしつかえがありますか」と言いました。ピリポが「あなたが真心から信じるなら、受けてさしつかえはありません」と言うと、宦官は「私はイエス・キリストを信じます」と答えました。イエス・キリストこそ神の子、救い主だと信じて、宦官はピリポからバプテスマを受け、その信仰を告白したのです。二人が水から上がると、主の霊がピリポを連れ去ったので、宦官は再び彼を見ることはありませんでした。でも、イエス様によって救われた喜びに満たされて、宦官は自分の国へと帰って行きました。神様を熱心に求めたこの一人の宦官の救いを通して、イエス様によって与えられた福音(すばらしい救いのニュース)は、アフリカ大陸にまでも伝えられていったのです。

まとめ

エチオピアの宦官は、遠くから礼拝に来て聖書を読んでいました。でも、自分だけではイエス様のことがわからなかったのです。この宦官の救いは、聖霊の導きに従ったピリポを通してなされました。同じように、私たちが真の神様のもとに導かれたのは、神様に従って福音を伝えてくれた人々がいたからです。皆さんの周りにも、エチオピアの宦官のようにに本当の神様を求める人々、教会に行ってみてみたいと思うお友だち、イエス様のお話を聞いてみたいと思うお友だちがきっといるはずです。神様はそのお友だちのために皆さんを用いたいと願っておられます。私たちもピリポのように、聖霊なる神様の導きに従って、その人々に、すべての人の罪のために十字架につけられ、死んで甦った、ただ一人の救い主であるイエス様のことをお伝えしていきましょう。

♪すばらしい神様♪

(プレイスワールド23)



聖書 サムエル上3・1～14 テーマ サムエル花の子どもの日 (中心聖句3・9)

序論

(金井)

6月の第2主日は教会暦で「子どもの日」とされている。今日は、預言者サムエルの少年時代の記録から学びたい。

一、主に献げられた少年

士師時代の終わり、紀元前11世紀にイスラエルは危機を迎えた。主に仕える祭司の息子たちは墮落して悪事を重ねており、民の倫理道徳も狂っていた。外からは、強い勢力を誇るペリシテ人がイスラエルに侵入して、民を圧迫していた。内憂外患の時代であったが、《そのころ、主の言葉はまれで、黙示も常ではなかった》。出エジプト以来、主の臨在とみ言葉に導かれて歩んできたイスラエルにとって、主のお導きが無いというのは致命的な欠陥である。しかし、主はイスラエルをお見捨てにならず、一人の偉大な預言者をお立てになった。それがサムエルである。

サムエルの母ハンナは、パレスチナの中央部、エフライムの山地に暮らしていた。ハンナは長年、子どもを授からないために、非常に悩んでいた。古代社会において子どもは最大の祝福とされており、逆に不妊の女性は恥辱を感じずにはいらなかった。夫エルカナにはもう一人妻がおり、その女性には子どもがいた。ところが、エルカナの愛情がハンナに向かっていたため、その女性は嫉妬してハンナを憎み、《ひどく彼女を悩まして、主がその

胎を開ざされたことを恨ませようとした》(1:6)。ハンナはシロにある主の宮に上った時に、《心に深く悲しみ、主に祈って、はげしく泣いた。そして誓いを立てて言った、「万軍の主よ、まことに、はしための悩みをかえりみ、わたしを覚え、はしためを忘れずに、はしために男の子を賜わりますなら、わたしはその子を一生のあいだ主にささげ、かみそりをその頭にあてません」》(1:10～11)。その祈りに主は応えてくださった。《エルカナは妻ハンナを知り、主が彼女を顧みられたので、彼女はみごもり、その時が巡ってきて、男の子を産み、「わたしがこの子を主に求めたからだ」といつて、その名をサムエルと名づけた》(1:19～20)。

ハンナはその誓いどおり、子どもが乳離れした時に主の宮に上り、その子を主に献げた。サムエルは幼い時から主に仕えたのである。

二、主の言葉を聴く少年

サムエルが主の宮で夜番をして寝ていた時に、主は《サムエルよ、サムエルよ》と彼を呼ばれた。しかし、彼はそれが主の声だとは気づかなかった。祭司エリに教えられて、四度目によくサムエルは、《しもべは聞きます。お話しください》と答えた。すると、その時、主はこれからしようとしていて、サムエルに語られたのである。

預言者とは、主の言葉を預かり、民に告知する者である。主の民を教え導く者は、語る前にまず自らが主の前に静まって、主の言葉を聴かなければならない。《しもべ》として忠実に、謙遜に仕える者に、主はみ心を明らかに示されるのである。

私たちの祈りの生活はいかなものか。私たちの聖書教授は本当に神ご自身の「メッセージ」になっているであろうか。

三、主の言葉を語る少年

その時、主がサムエルに語られたメッセージは、大変厳しい内容であった。主は言われた、《わたしはエリに、彼が知っている悪事のゆえに、その家を永久に罰することを告げる。その子らが神をけがしているのに、彼がそれをとめなかったからである》。サムエルは祭司エリに仕え、訓練を受けているしもべである。《サムエルはその幻のことをエリに語るのを恐れた》(3:15)。当然であろう。しかし、エリが《何事をお告げになったのか。隠さず話してください》と言ったので、《サムエルは、その事をことごとく話して、何も彼に隠さなかった》(3:17～18)。

今日においても、神に選ばれ、神に任命された教師は、いかなる状況にあっても、いかなる人に対しても、神の権威のもとに、忠実に神のメッセージを伝えなければならない。その内容は相手に都合の良いことばかりとは限らない。私たちもこの厳粛な使命のために、己をささげて仕えよう。

結論

主は少年少女にも語られる。主は少年少女をもお用いになる。ただし、主に用いられるためには、子どもであっても、その身を献げて、常にみ言葉を聴き、忠実に主に仕える者でなければならない。若き主の器を育てる親や教師の責任は重大である。

研究資料

(木村)

「そのころ、イスラエルには王がなかったたので、おのの自分の目に正しいと見るところをおこなった」(士師21・25)という霊的最暗黒の士師の時代から、王政の時代に移行する重大な転機に、イスラエルを正しく導くために神に立てられた人物がサムエル(神の名、の意)である。

テキスト

1 わらべ(ナアル、新改訳・新共同訳は「少年」)
1・22 「子」、創世記34・19 「若者」、歴代下13・7 「若く」もわらべ」と同語であり、乳飲み子から40代の壮年までを指す幅広い語であることがわかる。それゆえ、この語だけではサムエルが何歳であったか不明である。しかし、主の言葉を聞いて、それをエリに率直に語ることを恐れるあたり、それなりの年齢に達していたと思われる。その一方で、エリの指示に素直に従うところに、まだあどけなさを感じる。それゆえ、10代前半だったのではないかと思われる。ハンナは、もし男児が与えられたら、その子を一生主にささげると誓ったとおり(1・11)、サムエルが乳離れすると、祭司エリに預けたので、サムエルは、エリの前で、主に仕えていた。黙示(ハーゾーン、新改訳・新共同訳は「幻」) 幻は、主が預言者等にみ心を啓示するのしほしば用いられたもので、主の言葉と実質的に同じ(民数記12・6、イザヤ1・1、オバデヤ1、ナホム1・1他)。しかし聖書66巻によって啓示が完結した今は、主は聖書のみ言葉をもって語られる。主の言葉はまれで、黙示も常ではなかった。霊的に最暗黒の時代であったことを示

している。主は張り裂けるばかりのご自分の御思いを打明けることのできる人を求めておられた。そこで選ばれたのがサムエルである。

3 神のともしび 7つの枝をもつ純金の燭台のことであろう(出エジプト25・31〜37)。幕屋の聖所内に置かれていた。まだ消えず 「絶えずともし火をともしなければならぬ。夕から朝まで」ともし火を整えなければならぬ(出エジプト27・20〜21)とあるのは、夕から朝までは、ともしびを7つ全部つけるが、昼間は数を減らしてつけるということであろう。それゆえ、この出来事は明け方のことと思われる。神の箱 契約の箱のこと。幕屋の至聖所内に置かれており、その中には十戒を刻んだ石の板が納められていた(列王上8・9)。主の神殿 神殿建設はソロモン治世中であるから、幕屋のこと。至聖所内には大祭司だけ年に一度入れるのみであるから、サムエルは聖所内の燭台のそばで寝ていたであろう。

4〜7 サムエルよ、サムエルよ 主が二度名前を呼ばれるのは、緊急な用件・最後の言行のゆえ、また愛情のゆえである(創世記22・11、出エジプト3・4、使徒9・4)。ここにおります(創世記22・1、11、出エジプト3・4、イザヤ6・8) サムエルはエリに呼ばれたものと思ひ、自室で寝ているエリのもとへ3度とも走って行った。それは、サムエルが個人的にまだ主を知らず、主の言葉がまだ彼に現されなかった からである。

8 その時：悟った 同じことが三度繰り返された後やと悟るとは、最暗黒の時代とは言え、エリは祭司としてあまりにも霊的に鈍感であった。9〜10 四度目に主から呼ばれたとき、サムエル

はエリにほぼ教えられたとおり答えた。ただ主を省略したのは霊的無知のゆえか(7節)。

11〜14 耳が二つとも鳴る 災いについて聞き、ひどく驚く様子を表す慣用句(列王下21・12、エレミヤ19・3)。はじめから終りまで 完全な成就を表す慣用句。主はエリの家永久に臨む厳しさばきについて語られた。その子らが神をけがしているのに(2・12〜17)、彼がそれをとめなかったから である(2・22〜25)。忍耐深い主(詩篇103・8、Ⅱペテロ3・9)も遂に罪を裁かれた。何度も悔い改めの機会がありながら、それを拒絶する者には厳しいさばきが臨むということである。

しもべは聞きます。お話しください 「彼がその生涯において命をかけて務めた職は、神の言葉を全身全霊をもつて聞き、それをイスラエルの人々に聞かせること、すなわち『主の預言者』(3・20)としての職務だった。旧約聖書において『聞く』という語は『聞き従う』という意味を持つ。その意味でサムエルは、だれにもまさって彼自身が神に聞くしもべであり(3・10)、人々に対しても(王に対してすらも)その神の言葉に『聞く』ことを求めた(15・22)。(千代崎秀雄)。このサムエルの登場によって、イスラエルは最暗黒時代を脱し、新しい時代を迎えるのである。現代訳は「主よ。何なりとお言い付けください。私は従う用意ができております」。

参考図書 榎原康夫「サムエル記」『新聖書注解 旧約2』(いのちのことば社)、千代崎秀雄「乱世の指導者」(いのちのことば社)、R.F.Youngblood『1,2Samuel』The Expositor's Bible Commentary, Vol.1.8 (Zondervan) 他

聖書 サムエル上3・1〜14

タイトル サムエル

暗唱聖句 しもべは聞きます。主よ、お話

目 標 サムエルのようにお祈りする子

どもになるう。

導入

(木村純)

お母さんの名前はハンナ、イスラエルの国の最初の預言者、神様に名前を呼ばれた人とは、いったい誰でしょう。正解はサムエルさんですね。お母さんのハンナは以前、神様に「わたしに男の子を賜わりますなら、わたしはその子を一生のあいだ主にささげます」と約束したとおり、サムエルが乳離れたとき、シロにある主の宮に連れて行き、神様のご用のためにお献げしたのです。

主に仕えたサムエル

サムエルは、祭司エリの前で主に仕えていました。サムエルはこの時、まだまだ小さな子どもでした。時には寂しくて、「お母さん」と呼ぶことがあったかもしれませんね。それに加えて祭司エリの息子たちは、イスラエルの民が神様への供え物を献げようとすると、それを力づくで横取りするような、神様を畏れない悪い人たちで、お父さんに注意されても聞きませんでした。サムエルもその息子たちによつて、辛い思いをしたことがあったかもしれません。でもサムエルは、そのような中で、神のとしびを整えるという自分に与えられた務めをちゃんと果たしながら、神様にお仕え

していたのです。サムエルは、神様と人に愛される子どもとして成長していきました(2・26)。

主に祈ったサムエル

ある夜のことです。いつものようにサムエルが主の宮で寝ていたとき、「サムエルよ、サムエルよ」と呼ぶ声がしました。エリ先生が呼んだと思って走って行くと、「私は呼ばない。帰って寝なさい」とエリ先生が言いました。「あれ、確かに聞こえたんだけど、不思議だなあ」とサムエルは思ったでしょうね。サムエルを呼んだのはいったい誰だったのでしょうか。皆さんはわかりますか。同じことが三度繰り返し返されたとき、ようやくエリ先生は、神様が少年サムエルを呼んでおられるのだと気づきました。それでエリ先生は、もし今度呼ばれたら「しもべは聞きます。主よ、お話してください」と答えるよう教えました。サムエルは自分の部屋に帰って寝ました。すると、「サムエルよ、サムエルよ」と呼ぶ声がしたので、エリ先生に教えられたように、「しもべは聞きます。主よ、お話してください」と神様にお祈りしました。

主の声を聞いたサムエル

サムエルの心が神様のほうに向けられたときに、神様はこれからエリの家に起こることを告げました。それは、息子たちの罪とエリ自身の罪のゆえに、エリの家を永久に罰するという厳しいものでした。神の言葉を伝えるために、神様は少年サムエルを用いられました。サムエルはその後、イスラエル全体に神の言葉を伝える預言者となりました。ハンナはお母さんの祈りと信仰の中で育てられたサムエルは、いつも神様にお祈りする人、神様の声を聞いて

て従う人となったのです。それゆえに、神様もまたサムエルのお祈りに答えられたのでした。

例話

M先生は、お父さんが牧師だったために、小さい時から聖書のお話を聞きながら育ちました。でも大きくなるにつれてだんだんと心が神様から離れていきました。心も生活も荒れてしまっていた17歳のある日、教会の集会に出席していたときに、聖書のメッセージを通して自分のみじめな罪の姿と、そんな自分を見捨てずに愛してくださるイエス様の大きな愛を知り、罪を悔い改めてイエス様を信じました。その時から罪赦された喜びが心を満たし、「こんな僕でもなにか神様のお役に立つ人になれるんじゃないか」と考えるようになりました。それから間もなくの日曜日のこと、お祈りする心で礼拝のメッセージを聞いていました。イエス様がエルサレムに入城されたときに、イエス様を背中にお乗せしたろばの子のお話を通してM先生は、「主がお入り用なのです」と自分に語られる神様の声を聞きました。その神様の声にお応えしてM先生は、イエス様をお伝えする人となるために自分自身をお献げしたのです(村上宣道著『ゆるぎなき未来』)。

まとめ

「しもべは聞きます。主よ、お話してください」とサムエルのような心で神様の前に出るときに、神様は聖書のみ言葉を通して皆さんにもお話してくださいいます。小さな私たちも、お祈りして神様の声を聞いて従っていきましょう。

♪サムエルさん♪(ふくいん子どもさんびか27)



聖書 使徒9・1～19 テーマ アナニヤ 父の日 (中心聖句9・10)

序論

(金井)

今日は父の日である。聖書には、多くの男性の優れた信仰の歩みが記録されている。今回から3回にわたって、使徒パウロの回心と宣教の開始に関わったアナニヤとバルナバの信仰に学びたい。

一、主の律法に忠実な人

紀元30年頃にエルサレムに誕生した、イエスをキリストと〈信じた者の群れ〉(4・32)は、32年頃ステパノの殉教に続いて起こった迫害によって、散らされてしまった(8・1)。その一部はエルサレムから240キロメートルほど北方にあるダマスコに逃れた。ダマスコは交通の要衝にあり、オアシスに恵まれた商業都市として栄えていた。この町には多くのユダヤ人が住んでいた。(アナニヤ)は、迫害を逃れてこの町に來たイエスの〈弟子〉の一人であり、ユダヤ人である。

アナニヤは〈律法に忠実で、ダマスコ在住のユダヤ人全体に評判のよい〉(22・12)人であった。ステパノに代表されるヘレニスト(ギリシヤ語を話す人)Ⅱディアスポラ(離散したユダヤ人)キリスト信者の宣教によって、イエス・キリストの福音がユダヤ教という古い皮袋を破る新しい命に満ちたものであることは、すでに露呈していた。それでもなお、キリスト教会はユダヤ教ナザレ派として(24・5)、ユダヤ人共同体に近くあった。イエス・キリストの福音は、「律法の行いによる

義」を追求するユダヤ教の限界を超越するものであるが、決して主の律法を否定するものではない(マタイ5・17・20)。神は、主の教えと戒めに忠実な人を重用されるのである。

二、主のみ声を聴く人

サウロ(ヘブル名サウル、ラテン名パウロ)がダマスコの近くで主イエスに出会って、目が見えなくなり、市内の家にいた時に、アナニヤは主のみ声を聴いた。「主が幻の中に現れて、「アナニヤよ」とお呼びになった。彼は「主よ、わたしでございます」と答えた。そこで主が彼に言われた、立つて、「真すぐ」という名の路地に行き、ユダの家でサウロというタルソ人を尋ねなさい。彼はいま祈っている。彼はアナニヤという人がはいつてきて、手を自分の上において再び見えるようにしてくれるのを、幻で見たのである」。

この主の命令は、アナニヤには理解しがたいものであった。(アナニヤは答えた、「主よ、あの人がエルサレムで、どんなにひどい事をあなたの聖徒たちにしたかについては、多くの人たちから聞いています。そして彼はここでも、御名をとнаえる者たちをみな捕縛する権を、祭司長たちから得てきているのです」。

パリサイ派の伝道者サウロは、イエスの弟子たちを異端と断定しており、〈この道の者を見つけ次第、男女の別なく縛りあげて、エルサレムにひっぱって来るため〉にダマスコに來たのである。(主の弟子たちに対する脅迫、殺害の息をはずませながら)近づいてくるサウロを、ダマスコにいるキ

リスト信者たちは、非常に恐れて、警戒していた。アナニヤが異議を唱えたのも無理はない。けれども、僕(しもべ)たる者は(主)に従うべきである。

三、主の恵みに生きる人

主はアナニヤを諭された、(さあ、行きなさい。あの人は、異邦人たち、王たち、またイスラエルの子らにも、わたしの名を伝える器として、わたしが選んだ者である。わたしの名のために彼がどんなに苦しまなければならないかを、彼に知らせよう)。キリスト信者たちを迫害していたサウロがキリスト信者、それも伝道者となり、逆に迫害を受ける者となる。それが主の計画であった。

そこでアナニヤはサウロのいる家に行き、手をサウロの上において、(兄弟サウロよと呼びかけた。アナニヤは、主の弟子たちを殺害してきたサウロを(兄弟)として受け入れたのである。(アナニヤ)という名は、ヘブル語「ハナヌヤ」のギリシヤ語形であり、「主は恵み深い」という意味である。まさにアナニヤは、サウロに対する主の恵み深い(み旨)(22・14)を悟り、その恵みに動かされて、主の命に従ったのである。

サウロの目は見えるようになり、彼はバプテスマを受けてダマスコにいる信徒の交わりに加わり、「イエスこそキリストである」と宣教し始めた。

結論

アナニヤに関する記録は少ないが、史上最大の伝道者パウロの回心に関わった彼の功績は大きい。私たちも主に従い、恵みの業に用いていただく。

研究資料

(足立)

使徒パウロは徹底的な回心を経験した。それはキリストご自身により総合的な方向転換がなされたと言わざるを得ない。ルカが使徒行伝において3回詳細にこの出来事を記しているのは、重要である(9・1・30、22・3・21、26・2・23)。

本書9・1・30によると、教会迫害者からキリストの証人として迫害を受ける者となったパウロ、その完全な移行が強調されている。9・1・22は、三つの区分に分けられる。ダマスコ途上の出来事(1・9節)、アナニヤがパウロに関わる(10・19前)、ダマスコのユダヤ人会堂での大胆な証をおとして、パウロの回心が最終的に確認される(19後・22)。今回はパウロの隣人となったアナニヤに焦点を当てている。

テキスト

10・12 パウロの回心ストーリー第二場面がダマスコで生じ、アナニヤという名の弟子が彼に関わった。どのようにキリスト者たちがダマスコに到達したかは定かではない。パウロの迫害により難を逃れようとする流れが差し迫る以前から、アナニヤは弟子であったように思われる。本書22・12からアナニヤがユダヤ人信仰者であったことがわかる。**主が幻の中に現れて** 14・16節の記述から明らかであるが、ここで語りかけておられるのは父なる神ではなく主イエスであった。この幻は特別なもので、タルソのサウロの名に始まり、彼の居場所、そして彼自身が祈っている姿で発見されることま

で記されている。パウロの祈りは、本書を貫く祈りの重要性を強調している(1・14、24、2・42、3・1、6・4、6、8・15、10・2、4、9、31、12・5、13・2・3、14・23、16・13、16、25、20・36、21・5、22・17・21、27・35、28・8)。また祈りと幻が同時に出てくるのは、ルカに共通している(ルカ1・10・11、3・21、9・28・29、22・41・43、使徒10・3・4、30、22・17・18)。

13・14 アナニヤは少しためらっている。彼はエルサレムでのサウロの行動を数多く聞いてきた。そしてなぜ彼がダマスコにいるかを明瞭に知っていた。すなわち祭司たちの指令でキリスト者を迫害するため。そしてサウロの行動は、その指導力を表している。**御名をとめる者たち** ここで信仰者を表す別の表現が用いられている。救いのために主の名を呼び求める人々(使徒2・21、22・16、ローマ10・13・14、1コリント1・2)。アナニヤも信仰者を**聖徒**と呼んでいるが、この表現は本書における最初の呼び方である(9・32、41、26・10)。**15・16** 主はその状況を知っておられ、サウロの使命感を変え、アナニヤの知らない驚くべき事実を語られた。今やサウロは主の選びの道具である。サウロは今、神のために終始働く新しい召命を持っている。彼の働きは、異邦人、王たち、イスラエルにイエスの御名を持ち運ぶことが含まれている。ここでの強調点は、サウロがキリストに仕えるために味わう苦しみにある(IIコリント11・23・28)。**17** アナニヤは信仰的に従順で、主の言われたこ

とを受けとめる。主に対して忠実な彼は早速出て行き、サウロに兄弟と呼びかける。アナニヤはサウロに、主が彼に手を置くよう命じたことを告げる。彼はサウロの視力が回復し、聖霊に満たされるため、仲保者となる。彼がしたことは影響力をもたらすのではなく、神とサウロを結びつけるためであった。ここで使徒でない者が、御霊の仲保者となっていることが重要である。教会の働きは重要な働きを託された信徒たちによって幾重にも拡大されていく。本書8章でピリポによって洗礼が施された。ここでは信徒アナニヤがサウロに手を置くことで、聖霊の働きが結びつけられている(8・17・18、9・17・18、19・6)。

9章の場合、手を置くことの目的は明白である。アナニヤの最初の呼びかけから断言できるが、聖霊はサウロを兄弟たちと結びつけようとしている。彼も主の証人となるため、上から力を注がれる。本書22・14・16において、この出会いは更に詳細に触れられている。また26・16・18ではアナニヤへの言及はないものの、サウロの派遣がもっと詳しく記され、主イエスのビジョンと結びつけられている。

18・19前半 ここでの記述により、9・9でサウロが経験したあらゆる制限が取り消されたと思象づけられる。彼は見える。そして食べ、飲める。彼の回心は申し分ない。

参考図書 Bock, D.L., Acts (Baker), Polhill, J. B., Acts (Broadman)。

聖書

使徒9・1～19

タイトル

アナニヤ

彼は「主よ、わたしでございま

す」と答えた。 使徒9・10

目 標

主の愛に満ちた父のようなアナニヤが用いられたことを見る。

導入

(木村純)

サウロ(別名パウロ)の名前を覚えていますか。救い主イエス様を命がけで宣べ伝えた人でした。では、アナニヤという人の名前を聞いたことがありますか。彼は目立たない人でしたが、大伝道者パウロ誕生のために大切な人でした。そのアナニヤを神様がどのように用いられたか学びましょう。

迫害者サウロ

サウロは、エルサレムに住む、イエス様を信じる人たちを捕まえては次々と獄に入れ、教会を荒らしまわっていました。それだけでは満足せず、他の町へ逃れていった人々をも捕まえて獄に入れるための権限を大祭司から授かると、その手紙を持ってダマスコの町へと向かいました。町の近くに来たときに、突然、天からの光がさして、サウロを照らしたのです。彼は地に倒れ、その時、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」という声を聞きました。サウロが「主よ、あなたは、どなたですか」と尋ねると、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」との答えがありました。復活のイエス様がサウロに現れたのです。目が見えなくなったサウロは、手を引いてもらって

ダマスコの町に入りました。彼は、3日間食べることも飲むこともせず、ただ祈っていたのです。その間サウロは何を考えていたのでしょうか。「イエスの弟子たちが宣べ伝えているように、十字架にかかって死なれたイエスは本当に甦(よみがえ)られたお方なのだ。だとしたら、このイエスこそ聖書に預言されていた真の救い主ではないか。自分は今まで何と大きな罪を神様の前に犯してきたのだろうか」と深く思い巡らしていたのではないのでしょうか。と同時にサウロは、これから自分はどうかすればよいのか全くわからなくなっていました。

アナニヤへの主のことは

そんな深い苦しみの中にあるサウロのために、神様はアナニヤを備えておられました。アナニヤは、ダマスコの町に住む、イエス様を信じる弟子の一人でした。その彼に主が幻の中で現れて、「アナニヤよ」と呼びになりました。彼は「主よ、わたしでございませう」と答えました。するとイエス様が「サウロというタルソ人を尋ねなさい」と驚くようなことを言われたのです。アナニヤは「主よ、あの人がエルサレムで、あなたの聖徒たちにどんなにひどい事をしたかについて私は聞いています。彼はここでもあなたを信じる人たちを捕まえに来たのです」と言って、行くのをためらいました。しかしイエス様は、「さあ、行きなさい。あの人は、これからわたしの名を多くの人々に伝えるためにわたしが選んだ者である」とさらに驚くことをアナニヤに告げました。

主に用いられたアナニヤ

深い神の御計画を知ったアナニヤは、人のうたさよりも主のお言葉を信じて、サウロの所へと出

かけました。家に入り、サウロの上に手を置いて、「兄弟サウロよ、見えるようになりなさい」と言う。と、その瞬間にサウロの目が開いて、再び見えるようになったのです。アナニヤは続いて、「あなたはすべての人に対して、復活のイエスの証人となるために神様に選ばれたのです。イエスの御名によってバプテスマを受け、あなたの罪を洗い落としなさい」と、サウロのなすべきことを告げました(使徒22・12～16)。サウロは、神様の前に今までの罪を悔い改めて、自分の罪をも負ってくださったイエス様を救い主と信じて、バプテスマを受けました。彼は全く新しい人へと造り変えられたのです。その後、ダマスコの諸会堂で、イエスは神の子、キリストであることを宣べ伝え始めました。それを聞いた人々は、180度変えられたサウロの姿にただ驚くばかりでした。

まとめ

サウロが新しい人として生まれ変わり、神様のために多くの働きをなすために、神様はまずアナニヤを用いました。アナニヤはサウロにとって「兄弟よ」と挨拶した最初の友であり、神の言葉とみ心を伝えてくれた人でした。そのことによってサウロは再び立ち上がることができたのです。皆さんの周りで苦しんでいる人、悩んでいる人、弱っている人を勇気付け、立ち上がらせるために、神様は皆さんの名前を呼ばれるかもしれません。その時、アナニヤのように、「主よ、わたしでございませう」「主よ、ここにおります」(新改訳)と私たちもお応えできる者でありたいですね。

♪ことりたちは♪

(子どもさんびか10)



聖書 使徒9・26〜31 テーマ バルナバ (中心聖句4・36)

序論

(金井)

使徒行伝の前半はペテロを中心として教会の誕生と成長を記しているが、後半はパウロ(サウロ)を中心として宣教が拡大した様子を伝えている。今回と次回は、パウロの良き理解者となつて、彼を大伝道者に育てたバルナバの信仰に学びたい。

一、慰めの子バルナバ

バルナバについての記録は、使徒行伝4章36〜37節に最初に出ている。①バルナバは地中海東部にある(クプロ)島で生まれた。②彼の一族は宗教的公務に携わる(レビ人)であった。③彼の本名は(ヨセフ)である。④彼は(使徒たちにバルナバ(「慰めの子」との意)と呼ばれていた)。⑤彼は(自分の所有する畑を売り、その代金をもつてきて、使徒たちの足もとに置いた)。エルサレム教会の初期から、彼は忠実なメンバーであった。(「慰め」と訳される語の原意は「側に助けを呼び寄せる」である。バルナバは人々の窮状を見て見ぬふりができず、自ら犠牲を払ってでも人々を助けようと行動する、心の優しい人であった。

二、難問にぶつかったサウロ

ここで前回の話の続きに入るが、サウロ(パウロ)はダマスコで回心して後まもなく、アラビヤ(ナバテア王国)に行つて、足かけ3年そこに滞在した(ガラテヤ1・17)。この期間にサウロは、

イエス・キリストを中心とする救済史の視点から旧約聖書を再解釈して、新しい神学を構築したのだろう。その後、彼は再びダマスコに行つて、イエスこそキリストであると宣教したが、ユダヤ人から命をねらわれるようになった(9・23〜24)。そこでサウロはダマスコから逃れ、35年頃にエルサレムに上京した。エルサレム教会はキリスト教会の本来本元である。そこにいる使徒たちに自らの信仰と神学を認めてもらうことが、サウロにとって、その後の宣教活動のために必要であった。

(サウロはエルサレムに着いて、弟子たちの仲間に加わろうと努めたが、みんなの者は彼を弟子だとは信じないで、恐れていた)。サウロは若き日にエルサレムで、ユダヤ教を代表する律法学者ガマリエルに弟子入りして学んだ律法学者である(22・3)。そしてサウロは、パリサイ派の伝道者として、イエスをキリストと信じる「異端分子」を撲滅することに使命を感じ、エルサレム教会の多くの信者を捕縛して、投獄し、殺害していた(8・1〜3)。エルサレム教会の(みんなの者)がその過去を知っていたから、サウロが彼らに受容されるのは、かなり難しいことであった。

もし、このままサウロがエルサレム教会の使徒たちと信徒たちに受容されないままであつたら、その後のキリスト教世界はどうなつていたことか。サウロは、自らの宣べ伝えている福音が人間によるものではなく、先輩の使徒たちによるものであることに絶対的な確信を持っていた(ガラテヤ1・11〜17)。おそらくサウロは単独でも、異

邦人の使徒としての使命を果たしていっただろう。だが、そうなれば、キリスト教会は異邦人やヘレニスト・ユダヤ人を中心としたパウロ派とヘブライスト・ユダヤ人を中心としたペテロ・ヤコブ派に大きく分裂していたかもしれない。

三、バルナバのとりなし

(ところが、バルナバは彼の世話をして使徒たちのところへ連れて行き、途中で主が彼に現れて語りかけたことや、彼がダマスコでイエスの名で大胆に宣べ伝えた次第を、彼らに説明して聞かせた。それ以来、彼は使徒たちの仲間に加わり、エルサレムに入入りし、主の名によって大胆に語り、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちとしばしば語り合い、また論じ合った)。この危機にあたって、バルナバだけはサウロを受け入れて、彼の話に理解を示した。そして、バルナバはサウロを使徒たちに引き合わせ、彼のキリスト信仰が真実であることを彼らに説明した。実に勇気のある愛の業である。この後、サウロは命をねらわれたため、故郷のタルソへ帰ったが、(教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤ全地方にわたつて平安を保ち、基礎がたまり、主をおそれ聖霊にはげまされて歩み、次第に信徒の数を増して行つた)。

結論

教会にも人間的な弱さから問題は起こる。しかし、慰め主なる聖霊に満たされた聖徒を用いて、主は問題を解決してくださる。私たちも主の愛に満たされて、大きな愛に生きる者となろう。

研究資料

(木村)

サウロの救いと召し、使徒たちの仲間入りのために用いられたのが、先週のアナニヤであり、今日のバルナバである。偉大な使徒パウロ（13・9以降、ローマ市民名のパウロとなる）誕生に際して、彼らは助産婦のような役割を演じたのである。

テキスト

26〜27 エルサレムに着いて ダマスコでサウロ殺害計画が企てられ、そこから間一髪救われたサウロは（23〜25節、Ⅱコリント11・32〜33）、エルサレムに向かった。しかしそこは彼にとって困難な地であった。昔の仲間たちはサウロの変節を知り、新しい仲間となるはずの主の弟子たちはサウロの激しい迫害ぶりを知っているからである。努めた（新改訳は「試みた」） 未完了時制は、パウロが弟子たちの仲間に加わろうと して、一度や二度ではなく、繰り返し忍耐強く試みたことを表している。みんなの者は彼を弟子だとは信じないで より効果的に教会を撲滅するため、サウロは救われた振りをして教会内部に入り込み、一網打尽にする魂胆ではないかと考え、サウロの救いを誰一人信じなかったのは無理もない。恐れていた そのような中、唯一サウロを擁護したのがバルナバ（慰めの子の意）で、彼は「クプロ生れのレビ人」（4・36）、ヘレニスト（中段28〜30の解説参照）であった。孤立するサウロにとって、バルナバはまさに慰めの存在であった。世話をして（エピランバノマイ。抱きとめる、つかまえる、興味・関心をもつ、の意。新改訳は「引き受けて」）バルナバはすでにサウロと知り合っており、彼の

救いが本物であることを確信していたのであろう。バルナバはサウロを抱きとめるようにして引き受けた。使徒たちのところへ連れて行き この時サウロと会った使徒は、「ケバ（ペテロ）」と「主の兄弟ヤコブ」の二人のみであった（ガラテヤ1・18〜19）。バルナバはサウロの暗い過去にいつまでもこだわらず、彼の救いと召しという明確な現在と有望な未来に目を留め、サウロが大使徒となる道を備えたのである。伝道旅行から脱落したマルコに対しても同様であった（13・13、15・36〜40）。その結果、Ⅱテモテ4・11、Ⅰペテロ5・13）。28〜30 人望厚いバルナバ（4・36、11・22）の骨折りと保証によって、それ以来、彼は使徒たちの仲間に加わることができた。エルサレムは、「使徒以外の者はことごとく、ユダヤとサマリヤとの地方に散らされて行った」（8・1）大迫害の地であるが、サウロはダマスコ同様、エルサレムでも主の名によって大胆に語るようになった。ギリシア語を使うユダヤ人たち（ヘレニステース）パレスチナ以外で生まれ育った、いわゆる離散（ディアスポラ）のユダヤ人で、ヘレニストと呼ばれる。ギリシア語を使った。サウロ自身ヘレニストであったが、彼の場合はヘブル語も話せた（22・2）。語り合い：論じ合った どちらも未完了時制で、サウロがしばしばそうしていたことを表している。サウロもステパノ同様、諸会堂おもにヘレニストたちと議論した。しかし、ここでもサウロ殺害が企てられたので、兄弟たちは力を合わせてサウロをタルソへ送り出した（22・17〜21）。タルソはサウロの出身地で（9・11）、当時の世界における学問の三大中心地の一つであった。以前は

教会の迫害者、輝かしい経歴を持つパリサイ人であったサウロが、今度は主の弟子として帰郷したのである。家族や知人は一体どう思ったことであろうか。サウロは「その後：シリヤとキリキヤとの地方に行った」（ガラテヤ1・21）。

31 こうして教会は 同様の宣教の伸展報告が、6・7、12・24、16・5、19・20、28・31にも出てくる。聖霊にはげまされて 十字架前夜、やがて「助け主」（バクレートス。そばに呼ばれた者、弁護者、慰め主、の意）なる聖霊が遣わされるとイエスは弟子たちに言われたが（ヨハネ14・16）、その約束は真実であった。保ち：増して行つた 本節の主動詞はこの2語（「基礎がかたまり」と「おそれ」は分詞）。どちらも未完了時制で、継続的な平安と成長を表している。ステパノ殉教、それに続くエルサレム教会への迫害によって、信者が各地に散らされ、福音はユダヤ、ガリラヤ、サマリヤ全地方に広まっていった。そして迫害者サウロの回心という劇的な結末。そのサウロは「弟子たちの仲間に加わろうと努め」、教会はサウロの回心を確信するや否や、仲間を迎え入れた。以上より、教会（単数形）は…平安を保ち…次第に信徒の数を増して行つたのである。教会 が単数形であるのは、諸教会がユダヤ、ガリラヤ、サマリヤ全地方に点在している、実質的には一つであることを表している。参考図書 榊原康夫『聖書講解 使徒の働き 上巻』（いのちのことば社）、F・F・ブルース『使徒の働き』（聖書図書刊行会）、R・N・Longenecker『The Acts of the Apostles』The Expositor's Bible Commentary, Vol. 9 (Zondervan) 他

聖書 使徒9・26～31

タイトル バルナバ

暗唱聖句 使徒たちにバルナバ(「慰めの子」との意)と呼ばれていたヨセフ

目 標 使徒4・36

慰めの霊に満たされたバルナバのようになろう。

導入

(木村純)

先週は、教会を迫害していたサウロが復活のイエス様に出会って新しい人に変えられたことを学びました。サウロはますます心が燃えてイエス様が救い主であることを伝えたので、ダマスコに住むユダヤ人たちはサウロを殺そうと計画したのです。そのことがサウロの耳に入ったので、彼の弟子たちは夜の間にサウロをかごに乗せて町の城壁の外につりおろしました。サウロはそこから逃れてエルサレムの町へとやって来しました。

仲間に入れなかったサウロ

サウロはエルサレムの教会に着くと、弟子たちの仲間に入ろうと何度も努力しました。でも誰一人、彼を信じてくれる人はいませんでした。サウロがイエス様を信じたというのは見せかけで、スパイのように教会に入りこんで、皆を捕まえようとしているのではないかとサウロを疑い、恐れていたのです。それほど迫害者サウロが造り変えられたというのは、皆にとつて信じられないような出来事だったのです。サウロはどんなに傷つき、寂しい思いをしたことでしょうか。

慰めの子バルナバ

ところがそのような中でただ一人だけサウロを信じてくれた人がいました。それがバルナバです。慰めの子という意味の名前です。彼の本当の名前はヨセフでしたが、ニックネームのほうが有名なほど、慰めの子というのは彼にピッタリのあだ名でした。彼はサウロを使徒たちの所へ連れて行き、サウロがダマスコの町へ行く途中で復活のイエス様に出会ったこと、イエス様がご自分のことを伝えさせるためにサウロを選ばれたこと、サウロがダマスコの町でイエス様のことを大胆に宣べ伝えたことなどを皆に説明しました。バルナバはサウロをしつかり抱きとめ、執り成したのです。サウロの心はバルナバの執り成しによってどんなに慰められたことでしょう。バルナバの執り成しによって、イエス様がサウロを選んで受け入れてくださったことを知った弟子たちは、初めてサウロを仲間を迎え入れました。それ以来サウロは、エルサレムの教会に自由に出入りできるようになりました。かつてイエス様を信じる者を次々と捕まえては獄に入れていたエルサレムで、今度はそのイエス様の御名を大胆に語り始めたのです。ギリシヤ語を使うユダヤ人たちと語り合っているうちに、彼らはサウロを裏切り者として殺そうと狙っていました。サウロの仲間たちがそれを知って、彼をエルサレムからカイザリヤの町へ送り出しました。バルナバの執り成しによって、サウロにはたくさんの仲間、兄弟たちが与えられ、守られることになったのです。

教会の前進

こうして教会は、迫害の中でもイエス様を中心として、お互いに受け入れ合い、一つとなって、聖霊に励まされて前進し続けました。そして、イエス様を信じる人たちの数がどんどん増えていったのです。イエス様は、天に昇られる前に弟子たちに「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」と約束してくださいました。イエス様による福音(すばらしい救いのニュース)は、聖霊を受けた弟子たちによってさらに伝えられ、たくさんの方が誕生していきました。

まとめ

教会が一つとなっていくために、バルナバの果たした役割はとても大きなものでした。皆さんの周りにも、サウロのように仲間に入らず、独りぼつちで寂しい思いをしているお友だちはいないでしょうか。自分がその立場だったらどうでしょうか。独りぼつちのときに、誰かが声をかけてくれてお友だちになってくれたとしたら本当にうれしいですね。皆さんにもそのような経験がありませんか。その人を通して他のお友だちとも仲良くなっていけたなら、どんなに心は慰められ、明るくなることでしょう。学校に行くのも楽しくなりますね。バルナバはそのような人だったのです。私たちもどのような人をも愛して、受け入れてくださるイエス様のお心をいただいて、バルナバのように周りの人々に慰めを与える人としていたしましょう。

♪ラララジョイジョイ♪ (プレイズワールド31)



聖書 使徒11・19～26 テーマ クリスチャン (中心聖句11・26)

序論

(金井)

「クリスチャンって何だろう？教会って何だろう？これで良いのだろうか？」私たちは時々、たとえば問題にぶつかった時などに、考えることがある。聖書の教えから、その根本的な答を頂こう。

一、散らされた人たち

紀元32年頃にエルサレムで迫害を受けたヘレニストのユダヤ人キリスト信者たちは、地中海方面へと逃れていった。《ピニケ》(フェニキヤ)はレバノン沿岸地帯であり、《クプロ》(キプロス)は地中海東部の島である。《アンテオケ》は属州シリヤの首都であり、人口50万人を数える帝国第三の大都市である。彼らは《ステパノ》のことで起った迫害のためにやむなく各地に《散らされた》。しかし、それこそ神が定められた重要な計画が実行される開始点だったのである。

《散らされて行った人たちは、御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた》(8・4)。彼らは、《ユダヤ人以外の者には、だれにも御言を語っていないかった。ところが、その中に数人のクプロ人とクレネ人がいて、アンテオケに行つてからギリシヤ人にも呼びかけ、主イエスを宣べ伝えていた》。《クレネ》はエジプトの西にあるクレナイカの首都であり、《クプロ》同様、ギリシヤの文化的影響を強く受けていた地である。こうした地方では多くの異邦人がシナゴグ(ユダヤ教の会堂)に集つて

いた。しかし、割礼や食物規定、祭儀等、律法の問題があるために、彼らの多くは改宗できずにいたが、主イエスの福音はこの障壁を取り除いたのである。《主のみ手が彼らと共にあったため、信じて主に帰依するものの数が多かった》。ここに異邦人を多数含む教会が初めて生まれた。

教会は《みんなの者が一緒に集まっている》(2・1)ことが原点であり、重要だが、外に対して閉ざされた私的な内輪の交わりとなつてはいけない。時には、散らされることも必要である。

二、結び合わされた人たち

アンテオケ教会の《うわさがエルサレムにある教会に伝わってきたので、教会はバルナバをアンテオケにつかわした》。使徒たちはそれまでも、各地に生まれたキリスト教会を訪問し、あるいは使者を派遣していた(8・14、9・32、10・23)。それは、新しい教会の信仰を確認し、キリスト教会の一体性を保持するためであった。バルナバは、クプロ島にいるディアスポラ(離散したユダヤ人の家の出であり、《聖霊と信仰とに満ちた立派な人》としてエルサレム教会でも信頼されていたので、この役割に適任であった。

バルナバはアンテオケに着いて、その地の信徒たちと共に《神のめぐみ》を《よろこび》、《主に對する信仰を揺るがない心で持ちつづけるようにと、みんなの者を励ました》。彼は、①ヘブライス・ユダヤ人キリスト信者、②ヘレニスト・ユダヤ人キリスト信者、③異邦人キリスト信者、これらの異なる立場の者たちを結合したのである。

三、宣教する人たち

バルナバの良き牧会によって、アンテオケ教会では《主に加わる人々が、大ぜいになった》。そのため、バルナバの独力では牧会が困難となった。そこで彼は、《タルソ》に帰郷していた《サウロ》(パウロ)を訪ねてアンテオケに連れ出し、伝道牧会の同労者とした。《ふたりは、まる一年、ともに教会で集まりをし、大ぜいの人々を教えた》。

サウロがタルソに帰郷してから(35年頃)アンテオケに来るまでに(45年頃)、およそ10年の歳月が流れていた。しかし、バルナバはサウロを忘れなかった。バルナバは、①神がサウロに与えられた宣教者・神学者としての特別な才能を認め、②サウロに適した活躍の場に彼を導き、③共に伝道・牧会・教育の働きをしながら、サウロの成長を助けた。このアンテオケ教会がパウロの母教会として彼の伝道旅行を支えることになったのだから、両者を結んだバルナバの功績は大きい。

《このアンテオケで初めて、弟子たちがクリスチャンと呼ばれるようになった》。《クリスチャン》とは「キリストに従う者」という意味である。アンテオケの信徒たちが常々、人々にキリストを伝えていたことは、この一事でも明らかである。

結論

教会は神のもの、宣教を主導されるのも神である。私たちはキリストをかしらとする教会の一部分として、神に召されている。教会は一体である。私たちはへりくだって互いの賜物を認め合い、力を合わせ、心を一つにしてキリストを伝えよう。

研究資料

(木村)

アンテオケに最初の異邦人教会が誕生し、以後異邦人伝道の拠点となり、教会活動の中心がエルサレムからアンテオケに移るのであるが、その発端について記しているのが本日の箇所である。

テキスト

19 …散らされた人々 ステパノ殉教を機に「エルサレムの教会に対して大迫害が起り、使徒以外の者はことごとく、ユダヤとサマリヤとの地方に散らされて行った…御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた」(8・1〜4)。ピニケ(新改訳は「フエニキヤ」)パレスチナ北方の海岸地帯(現在のレバノン)。クフロ(新改訳は「キプロス」)フエニキヤから地中海を西に航行したところにクプロ島(現在のキプロス島)がある。アンテオケ(フエニキヤからさらに北上するとアンテオケ。シリヤ州の首都で、人口(約50万人)、富、力、そして悪徳においても、ローマとアレキサンドリアに次ぐ世界第三の都市であった。ユダヤ人が多数いた。ユダヤ人以外の者には 散らされた人々は、以上の地域に住むユダヤ人だけに伝道していた。20〜21 数人のクフロ人とクレネ人 散らされたユダヤ人キリスト者の中に、クフロ出身者と北アフリカのクレネ出身者がいた。これまでユダヤ人だけにしか伝道していなかったが、彼らはアンテオケに行つてからギリシヤ人にも…主イエス(ナザレのイエスこそ主、救い主であるという信仰告白に基づく呼称)を宣べ伝え た。その結果、信じて主に帰依する ギリシヤ人も多数起こされた。それは、主のみ手が彼らと共にあったため であ

る(ルカ1・66)。かつてエチオピア女王カンダケの高官やカイザリヤの百卒長コルネリオ一家のように、異邦人が救われた例があった。しかし彼らは「礼拝のためエルサレムに上り…預言者イザヤの書を読」む人であり、「信心深く、家族一同と共に神を敬い、民に数々の施しをなし、絶えず神に祈をしていた」人であったから(8・26〜39、10・1〜48)。今回の異邦人の救いは、これまでとは質量ともに明らかに異なるものであった。

22 バルナバを…つかわした かつてピリポによつて目覚しいサマリヤ伝道がなされた際、エルサレム教会はそれを実際に確かめるためにペテロとヨハネとを遣わしたように(8・14〜25)、今回はバルナバを遣わした。バルナバは、その人望ゆえ、また回心後のサウロと弟子たちとの仲介役を務めたゆえ、指導的立場にあった。今回も、アンテオケで起こっている主のみわさを偏見なく正しく認識し、ユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者との仲介役を果たす上で、彼以上に適任はなく、しかも「クプロ生れのレビ人」(4・36)であったから、バルナバが遣わされたのであろう。

23 神のみわさを見てよろこび 多数の異邦人の救いを実際に自分の目で見て確かめたバルナバは、神のみわさのみわさ以外の何ものでもないことを知った。そして、他の人々の成功を妬むことなく喜んだ(ローマ12・15)。バルナバは励ました(バラカレオー、未完了時制) バルナバが絶えず励まし続けていたことを表している。「慰め(バラクレシス)の子」(4・36)と同義語で、まさに名前どおりの働きぶりであった。持ちつづける 忠誠を保ち続ける、の意。特に異教の町では、粘り

強さ、持続性が不可欠である。

24 聖霊と信仰とに満ちた立派な人 ステパノ同様の高い評価(6・5)。こうして…大ぜいになった アンテオケ教会の飛躍的成長は、バルナバの人格とその働きに負うところが大きい。

25 サウロを捜しに(アナゼーテオー) 見つかるまであちこちら探し回る、の意。アンテオケ教会が急速に成長する中、バルナバは自分自身の限界を謙虚に認め、異邦人伝道のために召されたサウロに助けを求めた(9・15)。これはバルナバの麗しい人格を物語る判断であり、これによつてアンテオケ教会は、量的にも質的にも急速に成長していったのである。タルソへ出かけて行き エルサレムで一旦は弟子たちの仲間入りをしたサウロであったが、そこでも再び殺害計画が企てられたので、タルソへ戻つてた(9・26〜30)。

26 クリスチャン(クリスティアノス、新改訳・新共同訳は「キリスト者」) キリストの従者、キリストに属する者、の意(26・28、1ペテロ4・16)。アンテオケの異教徒たちが弟子たちにつけたニックネームで、ユダヤ教徒とは異なる弟子たちが多数存在している、土地の人々から注目されていたことを示している。他に、「道の者」(9・2)、「この名をとる者」(9・21)、「ナザレ人」(24・5)、「ガリラヤ人」(ルカ22・59)、「貧しい人」(ガラテヤ2・10)とも呼ばれていた。参考図書 榊原康夫『聖書講解 使徒の働き 上巻』(いのちのことば社)、F・F・ブルース『使徒の働き』(聖書図書刊行会)・R・N・Longenecker『The Acts of the Apostles』・The Expositor's Bible Commentary, Vol. 9 (Zondervan) 他

聖書
タイトル
暗唱聖句使徒11・19〜26
クリスチャン

このアンテオケで初めて、弟子たちがクリスチャンと呼ばれるようになった。使徒11・26

目 標
力強い聖霊に満たされた本物のクリスチャンにされよう。

導入

(木村純)

今日のお話の題は「クリスチャン」です。皆さんも今までに何度も聞いたことがあると思います。では、クリスチャンとはいったいどういう意味でしょうか。また、どうしたらクリスチャンになることができるのでしょうか。

アンテオケ教会の誕生

イエスを信じる弟子たちは迫害によって散らされ、その町々で同じユダヤ人にだけ神の言葉を語っていました。けれどもアンテオケの町に着くと、ギリシヤ人に対しても十字架につけられ、甦られたイエス様こそ救い主であることを宣べ伝えました。その結果、大勢の人々がイエス様を信じて真の神様に立ち返ったのです。このアンテオケの町で初めてユダヤ人以外の人々による教会が誕生しました。

バルナバとサウロによる奉仕

このニュースがエルサレムにある教会に伝えられると、教会はバルナバをアンテオケに遣わしました。バルナバは神様のなされたすばらしい恵みを見て喜び、イエス様を信じたばかりの人々に、これからずっとイエス様に留まっ

と励ましました。バルナバは、聖霊と信仰に満たされた立派な人だったので、その奉仕によってさらに大勢の人がイエス様のもとに導かれました。さらにバルナバは、以前イエス様を信じて180度変えられたサウロを捜しにタルソの町へ出かけ、アンテオケに連れて来ました。誕生したばかりの教会を指導するには、聖書をよく知っているサウロこそ一番ふさわしい人だと思ったからです。バルナバとサウロは心を合わせて丸一年間、アンテオケ教会の人々に聖書のみ言葉を教え、訓練しました。やがてこのアンテオケ教会からバルナバとサウロは世界宣教へと遣わされ、福音はさらにヨーロッパへと伝えられていくのです。

クリスチャン

さらにこのアンテオケで初めて弟子たちがクリスチャンと呼ばれるようになりました。それまでは、「この道の者」とか、「御名をととる者」(9・2、14)などと呼ばれていました。クリスチャンとは、キリストに属する者、キリストに従う者という意味です。クリスチャンたちがいつもキリストを語っていたことから、周囲の人々がつけたあだ名です。では、私たちはどうしたらクリスチャンになることができるのでしょうか。そのためにはまず、自分の罪を神様の前に悔い改めなければなりません。神様は犯した罪だけではなく、私たちの心の中までも照らして罪を示してください。そしてイエス様が自分の罪の身代わりとして十字架にかかれたことを信じましょう。そのとき神様は、私たちのすべての罪を赦して、賜物として

聖霊を与えてくださいます(使徒2・38、20・21)。

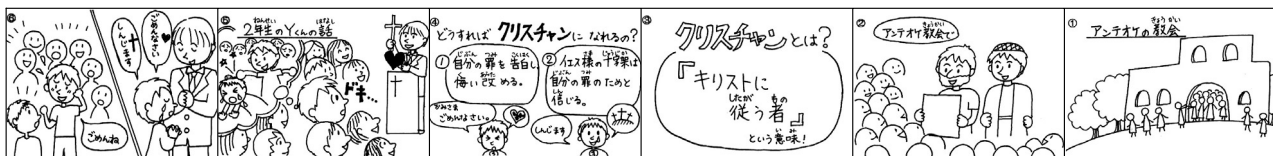
例話

小学校2年生のY君は、クラス一の体格で、成績も抜群でした。でもお友だちをいじめては悲しい思いをさせていました。ある土曜日の午後、教会で行われている「お楽しみ子ども会」に、お友だちに誘われて出席しました。そこで初めて聖書のお話を聞きました。「人間は本当の神様を知らないで、嘘をついたり、いじめたり、盗んだりして罪を犯しているのです」と教会の先生がお話しました。じつと聞いていたY君は、そつと立ち上がって、「僕は友だちのお金を盗んだ。人をいじめた。僕は罪人だ」と泣きながら悔い改め始めました。「私たちのどんな罪も赦されるために、イエス様が十字架についてくださったのよ。イエス様を信じて、神様にごめんなさいしましょうね」と先生がY君のために祈ってあげました。イエス様を信じたこの時からY君は変わりました。友だちのところへ行ってお金を返し、学校でも皆の前に出て、「皆、ごめんね。もういじめたりしないから」と謝りました。「Y君ってすごいよ。変わったよ」。そのY君によってクラスも変わっていったのです。(安海靖郎著『信仰と希望と愛』)。

まとめ

これまで、イエス様を信じて聖霊に満たされ、神様のご用のために用いられた人たちのことを学んできました。私たちもイエス様を信じて、聖霊に満たされた力強いクリスチャンとしていただき、イエス様を証していきましょ

♪よろこび広げよう♪ (プレイスワールド26)



牧羊ひろば

子どもたちの「居場所」づくり 放出教会教会学校

放出(はなてん)。

何か大安売りの広告のような地名の私たちの教会は、大阪城の真東、教会の屋上に立つと、ビルの間から大阪城が見える、大阪市と道一本隔てた東大阪市にあります。今でこそ駅前が高層マンション群が建っていますが、つい最近まで田んぼも沢山あった旧い町です。

教会学校は、教会創立と同時に、古い記録では、百数十名の子どもたちが集っていたようですが、それに比べると、当時の一クラスにも満たないというのが現状です。教師10名、生徒数20名。これが、二〇〇七年度の実態です。

私たちの教会学校の働きは、幼小科とJユース(中高生世代)の二つの働きがあります。礼拝は、どちらも日曜日の朝9時からの1時間です。幼小科は1階のホールで約40分の礼拝の後、らみい(幼稚園科)、サムエル(小学下級科)、ダビデ(小学中級科)、ヨナタン(小学上級科)に分かれて分級を行います。月に一度は合同分級として、おたのし



夏期学校



夏期学校

みタイムになります。Jユースは教会の4階で行われ、ギターやキーボードの伴奏でたっぷり賛美をささげスタートし、約50分の礼拝の後は、お菓子やお茶で交わりタイムです。二〇〇八年度は生徒のクラスバランスを考慮し、幼小科は小学科を上級、下級の2グループ編成とし、Jユースは生徒の増加のため中学生と、高校生世代の2グループに分けます。

年間行事は4月の「進級式」前担当の教師から手作りの表彰状を渡して進級を祝います。その前後に「進級遠足」を行います。二〇〇七年は「ハーベストの丘」に行きました。6月の「花の日」子どもの日」大人と合同で礼拝を守り、子どもたちの特別賛美をみんなの前で披露します。夏は幼小科のキッズサマーキャンプ(夏期学校)を金曜日から日曜日にします。教会外



Jキッズ クリスマス会

12月は「クリスマス会」数年前サント役を西洋人のクリスマスちゃんにお願いしたところ、子どもたちが大喜びしてくれたので、できるだけ探してお願ひしています。が、「クリスマスのフォーカスをサンタ



Jキッズ クリスマス飾りを作ろう

昨年からマイクロバスをチャーターして、教師たちの車の運転の苦勞を軽減しました。9月「振起日」遠足に出かけます。二〇〇七年は「キッズプラザ」に出かけました。

で1泊、教会に戻って1泊の2泊3日、1日目は自然の中で遊びます。2日目夕方には教会に戻り、近所の銭湯に行きます。2日目に教会に戻る事で、日曜日の教会学校はサマーキッズキャンプに参加できなかった子どもも、いつものように教会学校の礼拝に参加できます。

会場は二〇〇四年から、国立曽爾^{そに}青少年自然の家を借りています。



05' からクリスマス集合写真

に集中させたくない」という考えも根強いらしく、なり手を探すのがなかなか難しいのも現状です。イースターたまごは毎年CSの担当で、全教員に渡す数を作り、教員に喜ばれています。放出教会学校の働きの目玉は月に一度開催している「Jキッズ」といえると思います。

この働きは新会堂献堂(二〇〇〇年)を機に、「地域に開かれた教会」のスローガンの下でスタートし、小学生以下の子どもたちを対象にした、教会学校教師の手作りプログラムです。旧会堂でも、年に数回の地域向けのプログラムはありましたが、「日曜日は来られない子に」「毎月定例の居場所づくり」を目標に、第四土曜日に始めました。

内容は10分程度のバイブルメッセージと賛美、そして、月ごとのプログラムです。今まで行ってきたことは、毎月のプログラムはお餅つき、ビデ



才鑑賞、工作(風、紙飛行機、木工、ステンドグラスなど)、ジャンボシャボン玉、手打ちうどん、ミニミニ運動会、たこ焼き、クレープパーティ、屋店、クリスマス

ス会など多彩です。二〇〇七年は1月から「お餅つき」「たこあげ」「春風パーティ」「昔あそび①」「アイスクリームパーティ」「昔あそび②」「牛乳パック工作」「ゲーム&ポップコーン」「ミニミニ運動会」「クリスマスのデコレーション(ステンドグラス作り)」「クリスマス」などです。

多いときには80名の参加者がある時代もありましたが、様々な宗教アレルギーや、地域の子どもの活動が活発化したことに起因し、今は20名までの参加者で落ち着いてしまっていますが、参加してくれる子どもたちの、ふれあいを求めている姿は切実なものを感じます。「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである」とおっしゃったイエス様は、「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい」とも言われました。来るままにしておきなさいと言われるからには、空しいままで帰される方ではありません。人数は少ない分、かえって密度の濃い交わりができると思います。また、現在の教会役員の大半は教会学校出身者が占めていることを思うと、今後の教会のためにも教会学校の働きがどれほど大切であるかを痛感します。

「おわりに」

『牧羊者』二〇〇八年度第一巻をお届けできますことを感謝します。執筆の方々には教会総会など大変あわただしい中を執筆していただき、心から感謝いたします。

これからの教会学校の活性化を考えてゆく上で、過去の歴史を知ることがとても大切です。そこで教師養成講座「教会学校の歴史」を、元教団教会学校局長・元塩尻教会牧師の浮田益夫先生が、教会学校教師資格認定講座初級二を見直して執筆してくださいました。

また、多くの子どもたちに用いられるようになった「子ども聖書日課」により、親子でデボーションやみ言葉暗唱をしたり、「子ども聖書日課」により交換日記をして、しっかり教会につながっていることは感謝なことです。

また今号からの新カリキュラムの解説をご覧ください。今後も「牧羊者」そして、「子ども聖書日課」が大いに用いられ、各教会の教会学校が祝福されますように、引き続きお祈りください。

終わりに今号の執筆者を紹介いたします(敬称略)。

聖書講解 鎌野善三 加藤郁生 金井 望
研究資料 足立 宏 木村 勝志
メッセージ例 松浦みち子 大頭 眞一 木村 純子
ワーク 鎌野 幸 吉田 美穂

長谷川ひさ 長尾 秀紀
朝川 清 上森 恭子 杉山 俊一

中 高 科 朝川 清英
子ども聖書日課 小野 淳子
フライングカード 土屋 直子 藤井 洋美
また、校正の鎌野善三師、小岩裕一師、加藤 清師、光田隆代師、打ち込みの小岩喜代美師、藤井正子師、楠淳子師、カードの陰山恭子師、陰で労われた兄弟姉妹、発送とワーク印刷のベラカ出版の方々、印刷のアクトと菱三印刷に心から感謝します。(長谷川和雄)

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇〇八年度 一巻

発行所 有限会社 ベラカ出版

企画監修 日本イエス・キリスト教団教会学校局

神戸市兵庫区塚本通三三一九
電話(〇七八)五七五五一一九
FAX(〇七八)五七五五一一六
印刷所 菱三印刷株式会社

電話(〇七八)五七六六三九六一
*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み